

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

——チャビン式土器について——

歳 原 佳 世 子

I. チャビン文化

南米のペルーからボリビアにかけての海岸からアンデス山脈を中心とする中央アンデス文化領域では、インカ帝国を頂点として様々な文化の興亡が展開された。新大陸の諸文明は、旧大陸のそれとはかなり異なった特徴を有することは周知のとおりであるが、それらの特徴の多くが、紀元前約2000年からおよそ紀元前後まで続く“形成期”の間に形づくられたとされる。

中央アンデスの文化史は、諸地方文化の隆盛期と文化領域のほぼ全域を席捲する斉一的な文化期との繰り返し、と概ね把握することができるが、このような特徴が最初に認められるのもやはり形成期である。形成期は、上のような文化史的意義を背景として、下層、中層、上層の三期に区分されている¹⁾。下層は中央アンデス各地で個性的な土器が製作されはじめる地方文化隆盛期、中層は宗教的色彩の濃い特異なモチーフをもつチャビン文化が広範囲に波及したとされる時期、上層はその斉一性が崩壊しそれを土台としつつも河谷や盆地毎の地域的特色が強くなり、その後の地方文化の興隆につながっていく時期である。この中でも中層のチャビン期は、いわば形成期の鍵層として、中央アンデスの文化史上極めて重要な位置を占めている。

チャビン文化は、アンデス山中を北流してアマゾン川に合流するマラニョン川の小支流モスナとワチュクサ両河の合流地点にある、海拔3,100m強の一大祭祀センター、チャビン・デ・ワンタルをタイプ・サイトとする (Fig. 1)。この遺跡は17世紀からその存在が知られていたが、その重要性を認識し、この文化がアンデス文明の発展の基礎となったと主張したのは、J. C. テーヨだった。テーヨは、1919年にこの遺跡を訪れて以降、1930年代にかけて広範囲に踏査を行ない、この文化に属すると思われる遺跡を次々と発見、報告していった。その範囲は、海岸はエクアドル南部からパラカス半島、高地は北部山地からプカラ盆地にまで及んでいる。

チャビン文化遺物の特徴は、石造建造物、石彫、土器、モチーフの四点に大きくまとめることができる (Fig. 2, 3)。石造建造物は、U字形のプランと *sunken court* と呼ばれる地面を掘り窪めた特異な中庭を有する神殿建築をその中心としている。建築には面をきれいに整えた切り石を用いるが、厚い石一段と薄い石二段を交互に配する石積みが特徴である。また、神殿のプランからもうかがえるように非対称を好む傾向がある。チャビン・デ・ワンタルでは、基壇の内部に回廊、小室

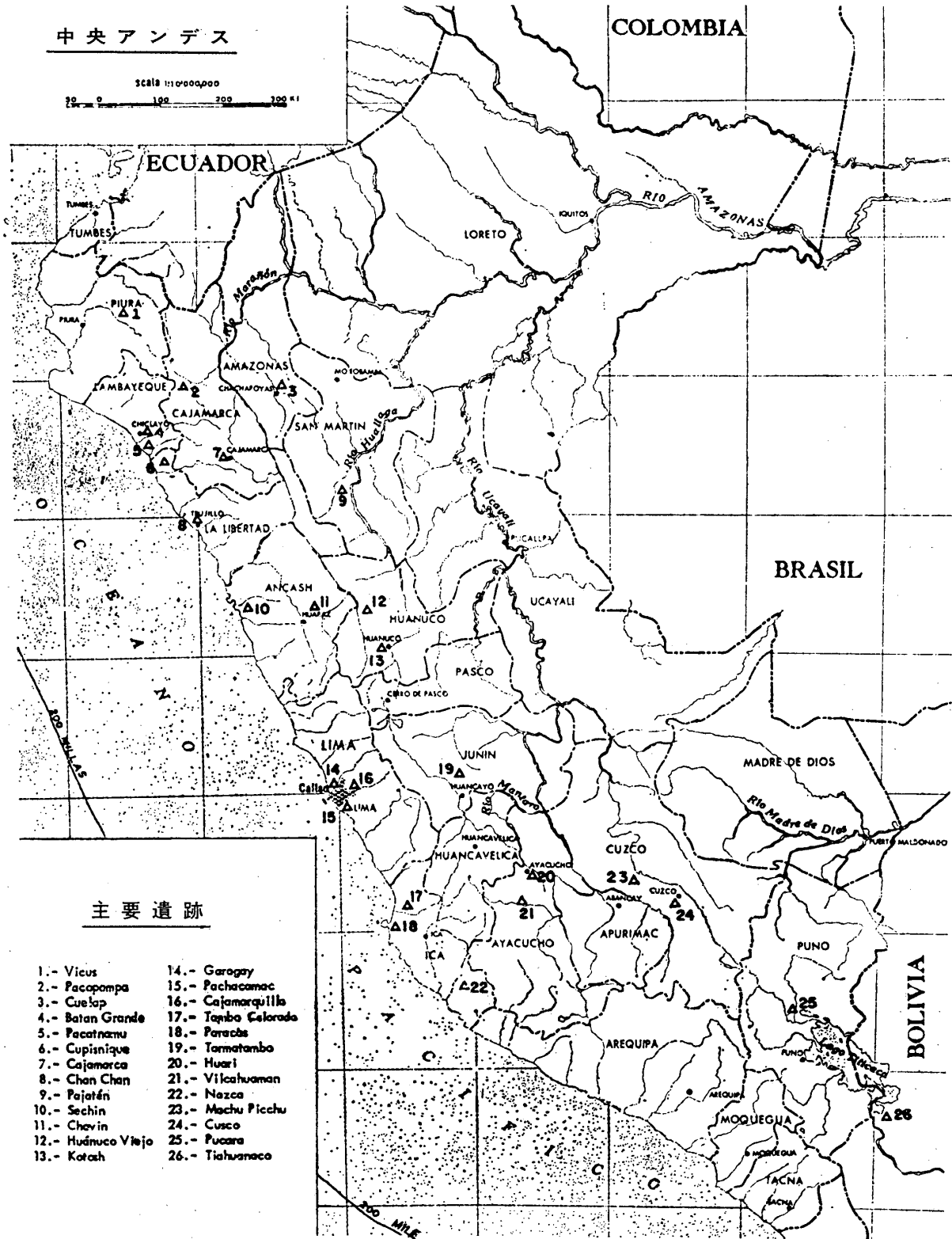


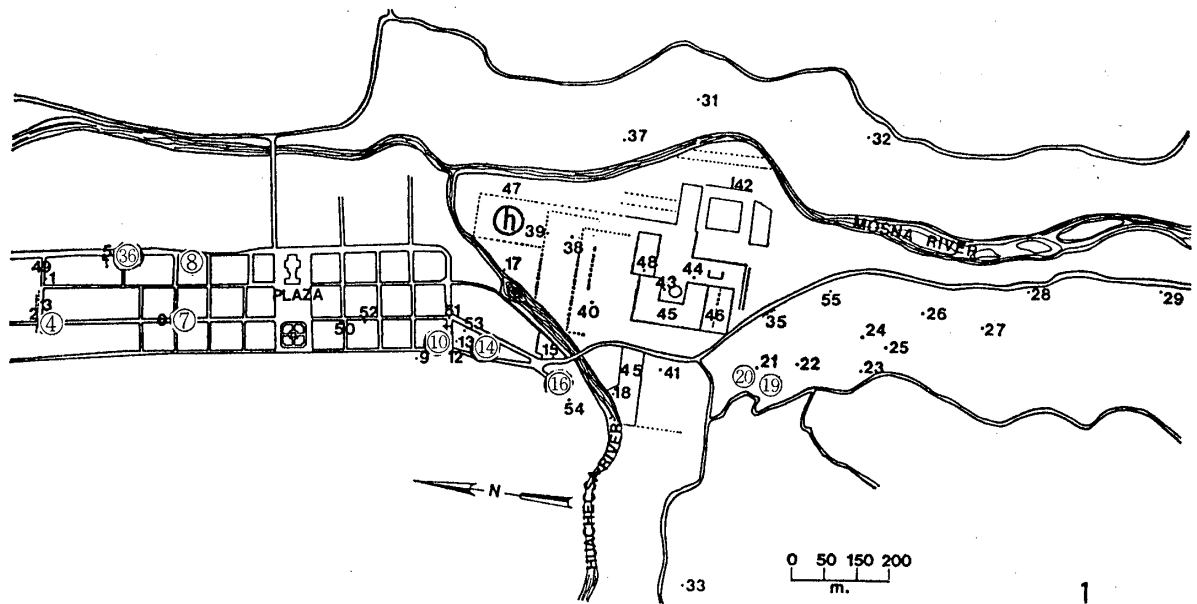
Fig.1 中央アンデス主要遺跡

が複雑に配置され、通気孔も備えられている。この地下の小室内や回廊に据えられた石像、基壇外側の眉石、軒じゃばら、石壁の隙間を埋める楔など、様々な素材に独特のモチーフが彫刻されている。それらは丸彫り、平彫り、高浮彫り、浅浮彫りと多様で、文様は基本的には曲線で描かれる。主なモチーフは、猫科動物、猛禽類、ワニ、ヘビ、及びその属性（牙、カギ爪など）、さらにそれと人間の属性との組み合わせで、かなり様式化されたものが多い。このようなモチーフは石彫だけでなく、骨角器、石器類、金細工、土器等にも描かれている。土器は、黒・赤・茶・灰色の単色でよく磨研されて光沢をもち、碗・鉢・無頸壺・短頸壺・長頸壺の他、特徴的な鏡型注口壺を有する。とりわけこの鏡型注口壺はつくり、施文共に入念である。文様は、種々の刻線、刺突、押捺、貼付、モデリング、ロッカー・スタンピングなどの技法を用いて、石彫と類似の様式化されたモチーフの他様々な幾何学的文様が描かれる。

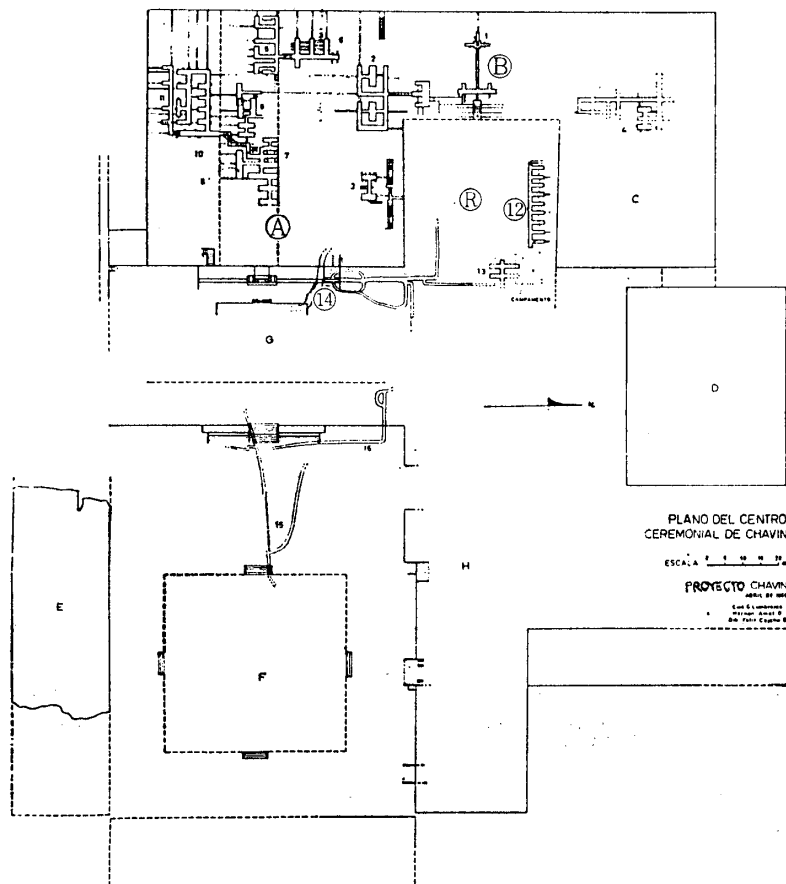
このような諸特徴、特に石彫のモチーフに基いて、テーヨはチャビン文化の起源をアマゾンの熱帯雨林とすると共に、この文化の古さと中央アンデスの後代の諸文化に対する影響を主張した。その後、チャビン文化の中央アンデス文化史の中での位置付けが、1943年にW. C. ベネットによって確定されるに至って、ようやく編年の大枠ができ上がった。一方、北海岸クピスニケで発見された一群の土器に基いて、ラルコ・オイレが1938年にチャビン文化の海岸起源を主張し、起源論争が活発化していった。こうした中で“チャビノイド”(類チャビン)という語が様々な脈絡で多用されるようになり、やがて“チャビン”そのものの内容もあいまいになっていった。テーヨは、起源に関しては様々に言及しているが、機能的観点からは“チャビン文化”や“チャビン文明”が何を指すのか十分に述べていない²⁾。やがてこのような混乱に対する批判と反省が提起され、G. R. ウィラーなどによって“チャビン”の意味するものもいくつかまとめて整理された³⁾ものの、定義は依然として不明瞭であり、その地理的分布範囲や時間幅はなお流動的だった。

その後1950年以降、各地で調査が進むにつれて様々な地方文化の存在が明らかになり、宗教的な石造大建造物が先土器時代からつくられていた可能性やチャビン・デ・ワンタルのものとは異なる祭祀建造物や土器文化の存在が指摘され、“先チャビン”、“非チャビン”といった捉え方がされるようになってきた。上述の、チャビン・デ・ワンタルの資料に基づいたチャビン文化の諸特徴が完全なセットとなって明らかになっているのは、これまでのところチャビン・デ・ワンタル遺跡のみである。海岸や北部高地の大建築や土器文化が判明してくるにつれて、チャビン文化の単一起源論は見直されるようになり、むしろ複数の地域の文化要素が統合されたもの、と理解されるようになってきた。しかしながら、諸地方文化とチャビン文化との具体的な関係は、地域研究の遅れもあっていまだ判然としない。

一方、チャビン・デ・ワンタル遺跡自体もL. G. ルンブレラスらによって継続的に調査が行なわれ、1960～70年代に土器スタイルに関していくつかの細分案が提出された。しかし、“神殿”という特殊な場のしかもおそらく奉納に使用されたと思われる場所や排水溝から出土した資料に依っていたため、なかなか明確な位置付けができずに二転三転していた。そして10年ほど前にR. L. バー



1



2

Fig.2 チャビン・デ・ワンタル遺跡

- 1 ; 発掘地点 4. B 9 区 36. B 10 区 8. B 1 ~ 7 区 7. B 8 区 10. A 4 ~ 6 区
 14. A 1 ~ 3 区 16. E 1 区 20. D 2 区 19. D 1 区
 2 ; 神殿部 12. オフrendas・ギャラリー 14. ロカス・カナル

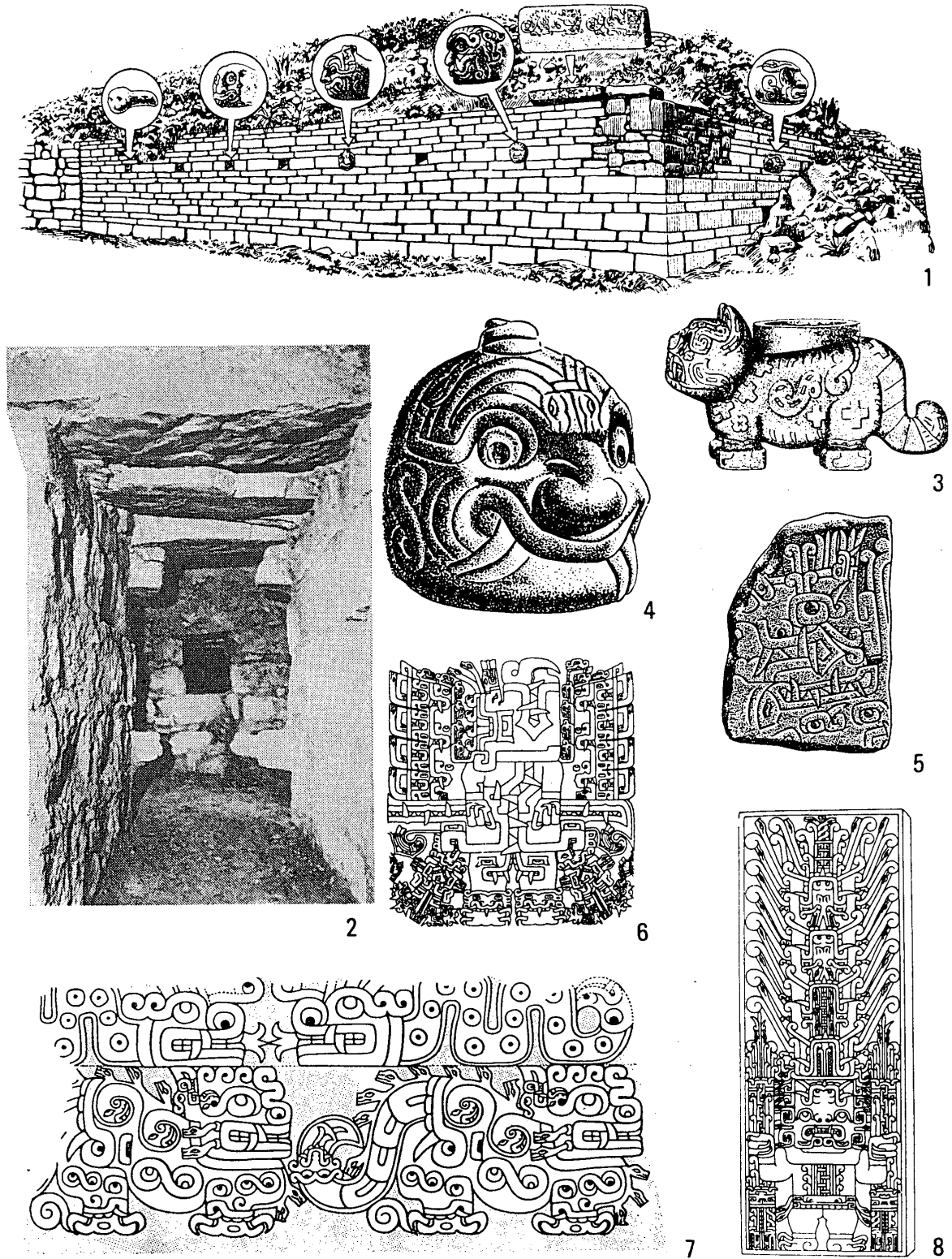


Fig.3 チャビン・デ・ワタルの建築・石彫類

- 1 ; 神殿外観 (南西から) 2 ; 地下回廊
3 ; 石臼 4~8 ; 石彫類

ガーが神殿周辺域の地点発掘を行なって、数カ所で文化層の重層関係を確認したとして、チャビン期を三期に細分し、チャビン文化期内での発展過程の追求と、地方文化とのより細かな対比の可能性を提示した。

チャビン・デ・ワントルにみられるような大事業を支える人口を養い得た生業に関しては、チャビン期、すなわち形成期中層にはトウモロコシ栽培と家畜飼育を経済基盤とした定住農耕社会が確立していた、とされる。しかし、どのような過程を経ていつごろどこで確立したのか、という問題をはじめ、先土器時代の建築を有する文化の経済的基盤、トウモロコシの起源問題、原初農耕期～農耕社会確立直前の様相など、重要な問題が未解決のままである。その中において、1970年代以降中央アンデス独特の自然環境のありかたに着目した生態学的観点からのアプローチが試みられており、次第に成果が蓄積されてきている。

チャビン文化は、各地域の文化の諸様相及びそれら相互の関係を充分把握した上で考えていかなければならないのであるが、考古学的には、発掘調査の対象が大建造物や神殿に集中し周辺の一般住居にはなかなか手が回らないこともあって、生活の復元や地域内での詳細な文化変遷の解明、地域毎の編年の確立が立ち遅れているのが現状である。一方チャビン文化自体も、明確な定義の確立、比較可能な資料の提示へ向けて、先述の四つの特徴を中心に検討を重ねていく必要がある。これらのうち、石造建造物は規模が大きいこともあって詳細な検討に足るだけのデータが未だにあまり集積されていない。石彫とモチーフは、共伴する建造物の構造や関係が明らかにならないと、特に時間的な位置付けが難しい。そこで、ここでは土器を扱うことになるが、それはこれらの理由や土器の一般的特性に加えて、後述するような近年の成果を評価したことによる。

チャビン文化の指標となる土器の“チャビン式土器”、“古典チャビン”という名称は、テーヨ以来用いられてきているがその定義は不明瞭で、チャビン式土器か否かの判断基準、時空間内の位置付けは、未だ定まったものとは言い難い。その主な理由は、テーヨ自身がこの名称を最初に使用した際に明確な定義を行わず、加えてチャビン式土器の説明の際に北海岸クピスニケの土器を用いた⁴⁾ために混乱を招いたこと、及びチャビン・デ・ワントルを発掘調査した研究者達が各々独自の分類や型式設定を行なって互いの資料の関係を明らかにしなかったため、彼らの資料を一律に比較することができない、といったことにあるといえる。

実際、各地でチャビンだと主張されている土器を見ると、内容は実に多様である。それらはペルー北半を中心に広がっているが、それらの土器に共通するのは単色で高度に磨研されていること、鉢、半球碗、鏝型注口壺が主な器形であること、であり、文様に猫科動物の属性を有することが特徴ではあるが、全てにみられるわけではない。さらにこれらの土器を少し詳細に見ていくと、斉一性というよりはむしろ地域性が顕著になってくる。一方、形成期文化はチャビン文化との関係を無視して考えることはできない。だがチャビン文化だと主張されている諸文化がチャビン文化とおそらく何らかの関係はもっていたにしても、それらの土器がチャビン式土器の範疇に入るかどうかは

十分に検討されなければならない。また、この文化の起源や発展経緯が従来考えられていたよりもはるかに複雑だった可能性があることを考えると、複数の由来や複雑な時間的変遷もその内容に反映されているものとも思われる。それゆえ、比較検討の基準となるべく、まずこの土器が最初に確認されたチャビン・デ・ワントル遺跡の土器文化を明確に把握しておく必要がある。アンデスの文化史上およそ1000年近い期間続いた文化であることから、遺跡内での発展過程をおさえるべく細分・編年も検討する必要があるだろう。もちろんタイプ・サイトの土器のみによって“チャビン式土器”が構成されているわけではないし、またチャビン・デ・ワントルが本当にチャビン文化の中心だったかどうかといった問題はある。しかし、それは各地域の様相が明らかになった時点で検討されるべきことであり、現在のところチャビン・デ・ワントルは少なくともこの文化の大センターの一つだったことはまちがいない、このような対象として充分であると思われる。

したがって、ここではチャビン・デ・ワントル遺跡出土の土器資料に限って扱うこととする。まず第一に遺跡内の土器文化の変遷過程を把握し、次にそれに基づいてチャビン式土器の定義試案を考えてみたい。このために、本遺跡出土の土器を全て同一の基準によって分類し、層位的証拠と考えあわせて細分・編年を試みる。

Ⅱ. チャビン・デ・ワントルの土器文化

(1) チャビン・デ・ワントル遺跡と調査史

遺跡は、モスナとワチュクサ両河の合流地点に位置する神殿区域と、その周辺のおそらく居住区域とに大きく分けられる (Fig. 2)。

神殿区域は、広さ約 5 ha にわたり、全体として東に開口部をもつ U 字形を呈している。中央部に角形の sunken court があるが、U 字形をつくる基壇の最奥部自体がさらに U 字形になっており、円形の sunken court がやはりつくられている。この最奥部の U 字形が最古の建造物 (旧神殿) で後に南へ拡張され (新神殿)、さらにその後東側に翼部等が増築されて、今日見るような規模になったといわれる⁵⁾。最古の部分はカスティーヨと呼ばれている (高さ約 10 m)。翼部東側は、モスナ川の氾濫で破壊されている。

居住区域は最近になって初めて調査の手が入れられたが、現在のチャビン・デ・ワントル村の下になっているためごく小規模な地点発掘しか行なわれておらず、具体的な様相はほとんどわかっていない。

テーヨは 1919 年の踏査旅行の際にチャビン・デ・ワントルを訪れ、土器片や石彫を発見したが、その後 1934 年にモスナ川の氾濫によって遺跡東側が破壊されて、堆積状態の観察が可能になって初めてチャビンとワイラスの重なりを確認し、チャビン文化を位置付けることができた。しかしチャビン文化よりも下層の文化の堆積の有無には何も触れていない⁶⁾。

1940 年に神殿区域を本格的に発掘して大量の石彫や土器片その他の資料を得たが、テーヨは結局それらを細分することができず、かつ編年上の位置付けも直感的には把んではいたものの確証が得

られなかったために明らかにすることができなかった。しかし、出土土器片中に異質なものが混在していることには気付いていた。この報告は、テーヨの死後1960年に出版されている。

一方、1938年にW. C. ベネットも神殿区域で16のピットを掘って調査しているが、やはり土器の細分はできず、編年上一つのものとして扱った⁷⁾。ベネットは、神殿区域の堆積では未攪乱の層位を把むのは難しいとしている。

その後1961年に、J. H. ロウが神殿外側（新神殿南）に小ピットを掘っているが、資料は公表されておらず、詳細は不明である⁸⁾。

1966年から、L. G. ルンブレラスと H. アマトが神殿区域を継続的に調査している。そして、旧神殿地下の回廊とその南東の地下排水溝から出土した遺物に基いて、初めてチャビン式土器の細分案を提示した。彼らは二つの地点からの出土資料を各々グループとし、チャビン式土器には二つのグループがあるほかそれらとはべつに異質の土器グループが三つあるとしている。そしてそれらの編年的位置付けを試みているが、層位的証拠が欠けているために確証がなく未だ定まっていな⁹⁾。本報告がまだ出ていないため、現時点では資料の多角的な検討はできない。

神殿区域周辺の居住地と思われる区域が初めて調査されたのは1977年だった。R. L. バーガーは、現チャビン・デ・ワンタル村内はじめ神殿の周辺域で十数カ所を地点発掘した他、表採も行なっている。発掘調査の結果、二つの異なる内容の層位的重なりを把んだとし、これに様式的セリエーションを加えることによって、チャビン・デ・ワンタル内に三つの土器文化連続があることが明らかになったと主張した¹⁰⁾。

以上の発掘調査で得られた資料のうち、ロウのものはデータが全く公表されておらず、ベネットのものは資料が少なくデータも不十分なため、ここでは除外する。残り三人の資料のうち、まず、層位的な根拠が示されているバーガーのものを検討し、次いでルンブレラス、テーヨの資料を同じ方法で分類検討し、それらをまとめてチャビン・デ・ワンタル遺跡の土器文化の内容、及びその変遷の様相を考えてみたい。

(2) 出土資料の検討

(a) R. L. バーガーの資料

バーガーは、チャビン・デ・ワンタルの居住パターンと土器連続を明らかにすることを目的として、神殿区域の外側で発掘調査を行なった。調査地点はA～Eの大きく5つに分かれる(Fig. 2-1)。このうちCを除く四地点で遺物包含層が確認された。うちE 1とD 1の二ヶ所で異なる土器文化が層位的に重なって発見されたとし、共に上層が同じ内容であることを根拠に、

E 1で ウラバリウ phase→ハナバリウ phase

D 1で チャキナニ phase→ハナバリウ phase

という文化連続を設定した。さらに両下層について、バーガーは様式的セリエーションによってウラバリウ phase→チャキナニ phase とし、よって

よって二つに分けられる。有文は、文様要素と施文技法に基づいて六つに分けられる。有文にも赤色のものがあるがあまり多くなく、繁雑を避けるためにここではその都度文中で触れていくことにする。したがって、分類基準は次のようになる。

無文	暗色～黒色	P I 類
	赤色（スリップ有無）	P II 類
有文	刻線区画＋刺突（含ダッシュ）	D I 類
	直線—幾何学文	D II 類
	曲線—様式文	D III 類
	貼付，器面凹凸	D IV 類
	地文技法	D V 類
	押印捺	D VI 類

器種は以下のように分ける（Fig. 4）。

- 無頸壺（M） 大型のものが多い。普通は無文。器表は良滑～磨研，裏は滑～粗滑。器壁は薄く，口唇が肥厚する。（粗製土器）
- 短頸壺（T） 大きさ，頸の長さや傾きにヴァリエーションがある。無文が多い。器表は良滑～磨研，裏は滑～粗滑。頸長：口径＝1：1 ≤。（精・粗製土器）
- 長頸壺（C） 単注口壺と鑿型注口壺とがある。比較的小型である。普通胴部に文様が付く。器表は磨研，裏は滑。（精製土器）
- 鉢（H） 半球形の碗と底部へ屈曲する鉢とがある。小型が多い。普通器表に文様が付けられる。一般に口縁下と胴半ば（碗）か底上（鉢）に1～数本の凹線を引き，中央の広い区画内に文様を描く。器表，内側共磨研。（精製土器）

これを用いて，以下，地点・層毎にみていくことにする。

<A地点の土器>（Fig. 15-1～15）

A 1～3区は旧神殿の北北西 200mに，A 4～6区はさらにその 50m先に位置する。A地点の資料は少量で層序も不明なので，一括して扱う。

P I 類と D III, V, VI 類が主体で，赤色のものはほとんどない。P II, D I 類は皆無である。

P I 類は T と C で，C の口唇部の外突が顕著である（2, 3）。D III 類は，曲線だけでなく直線や貼付技法を用いて，様式的文様を描く（4, 5, 9）。小片のため器種は判然としないが，器壁の湾曲具合から C 胴部か H と考えられている。D V 類には，ロッカー・スタンピング（6），鋸歯状具の押圧（7），櫛目，ダッシュ等がみられる。C の胴部が主である。D VI 類では，圏点文，不完全円文，三日月文，横 S 字文を 1～数段，口縁下に並べている。H と M がみられる。

<B地点の土器>（Fig. 5～8）

B地点は調査範囲の北端に近い部分で，現在のチャビン・デ・ワンタル村の中に位置する。B 1～7区は旧神殿の北 675m，B 8区はその西 100m，B 9・10区はそれよりもさらに北になる。前者

はさらに1～4区と5～7区に分かれ、両区のセクション面間の距離は5m強である。両区の層序を比較すると、層の深さ、厚さ、土層特徴の類似から、B1～3区の8層とB5～7区の12層、同様に6層と11層が各々対応するものと思われるが、確証がないので一応分けて扱うことにする。

ここでは、層位関係が明確で資料も多いB1～3区の6層とB5～7区の12, 11層について検討してみたい。他はその後で触れる。

12層にはP I, II, D I, II, IV, V類がみられるが、特にD II, V類が顕著である。D III, VI類はない。器種はM, T, H, Cがあるが、Hは特徴的な外反鉢が主体で文様は全てD II類に属する(10～13)。焼成後着色を有するものもある。一方、DV類は主にC胴部と外反鉢以外のHに施される。技法には、ロッカー・スタンピング(7)、鋸歯状具の押圧(8)、短い櫛搔と小瘤の組み合わせ、細かい刺突等がみられる。D I類は、直線的な帯状区画内に小刺突を列状に配したもので(6)、H(碗)やCの胴部がある。P, D類いずれにしても、口唇の肥厚はほとんどなく、器面調整はやや磨研度が劣る感があり、赤色スリップが目につく。

11層にはP I, II, D I, II, III, IV, V類がみられるが、P II類が多く、それに比して有文が少ない。文様は全容が不明なものが多い。D I, II類はHが主体、D III, IV類はおそらくHかCの胴部とされている。DV類は大型の三角形の区画の中に鋸歯状ロッカー・スタンピングを充填した例(15)の他に、櫛搔(+小瘤)(16, 17)がCの胴部に付けられる。全体的に器形はやはり肥厚が少ないが、Mの口唇の内突(3, 4, 5)等が目立ち始める。

6層はP I, II類とD III, IV, V類が主体となる。先述の12, 11層に顕在していたD I, II類や外反鉢はみられない。ここではDV類が卓越し種類も多い。貼付段上に櫛目文を施す例(8)、鋸歯状具の押圧(10)、小刺突(14)、櫛搔(+小瘤)(13)等がある。C胴部が多い。また数は少ないが、D III類がC胴部に付けられた例がみられる。無文のものは図示がごくわずかであるが、Hも含めて、器形特徴はあまり大きな変化がなく、いずれも肥厚が少ない(1, 2)。

B地点内のその他の土器は少数しか図示されていない。B5拡張区にはP I, II, D II, V類のHとCがみられる。D II類は外反鉢、DV類は櫛搔(+小瘤)で、Cの胴部である。やはり肥厚はほとんどない。B4プラットフォーム上では、P II類の特にMが多く、その他D II, V類の小片がわずかにみられる。Mの内突、内肥は顕著である。B8・9・10区は図示が極めて少なくよくわからないが、D I類のH(碗)(17, 18, 20)とP II類のT(19)がある。B1～3区7層ではDV類が目立つ。

B地点の土器は、全体的にP II類が多いこと、D I, II, V類が卓越すること、器壁の肥厚が極めて少ないこと、といった共通点があり、内容的には一つの文化と考えてよいであろう。けれども12, 11, 6層を比べると、D I類の有無、D II類の外反鉢の減少、DV類の種類の多寡、肥厚の増大等、かなりの変化が認められる。その他の地点出土のものも内容に偏りがあり、結局全体は大きく三群に分けることができる。すなわち、B5～7区12層、B5拡張区、B8・9・10区(B I群)、B5～7区11層、B4区プラットフォーム上(B II群)、B1～3区6層、7層(B III群)である。

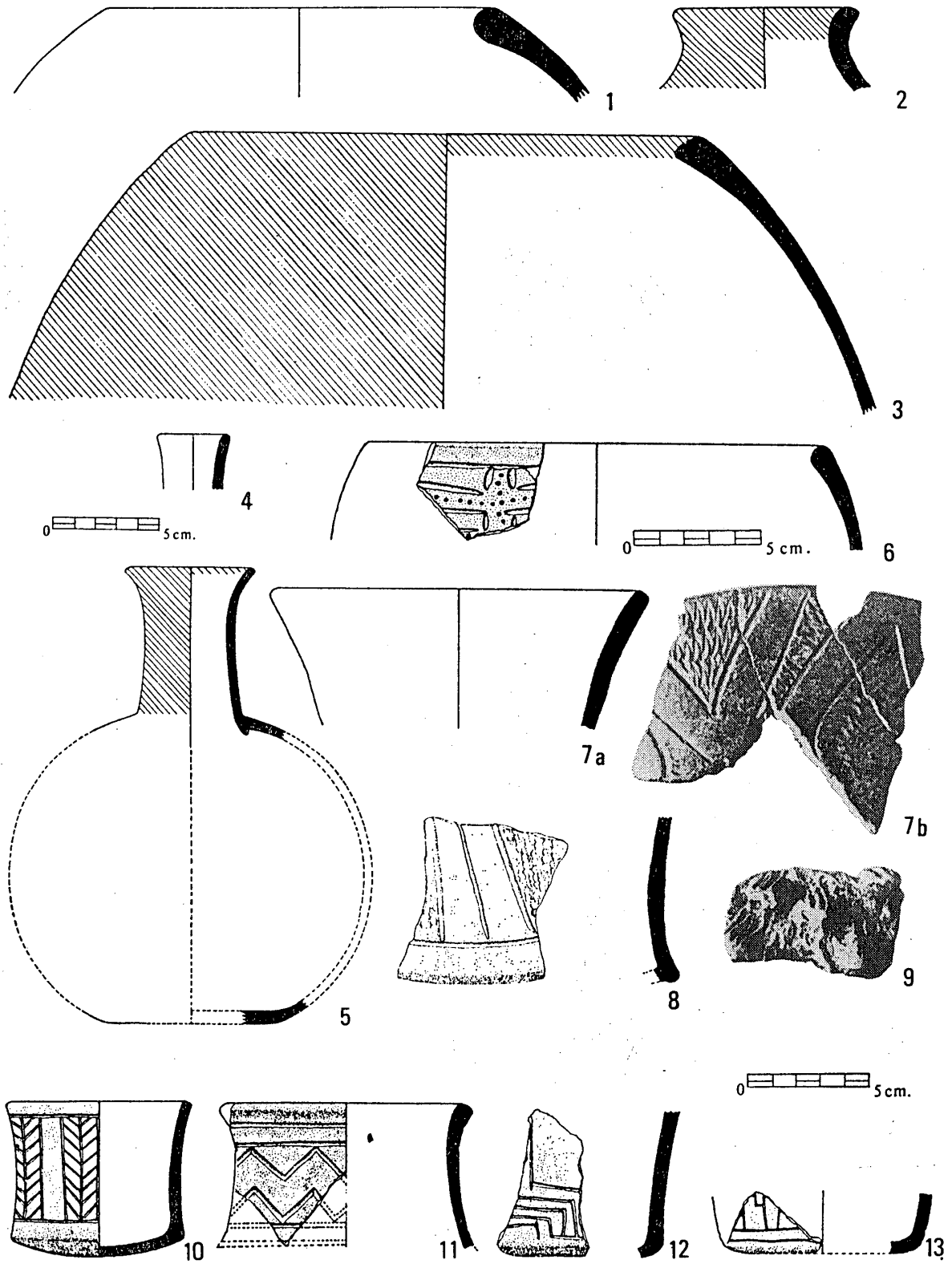


Fig. 5 B 5~7区12層出土の土器
 1, 4; P I類 2, 3, 5; P II類 6; D I類 赤色スリップ
 7~9; D V類 10~13; D II類

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

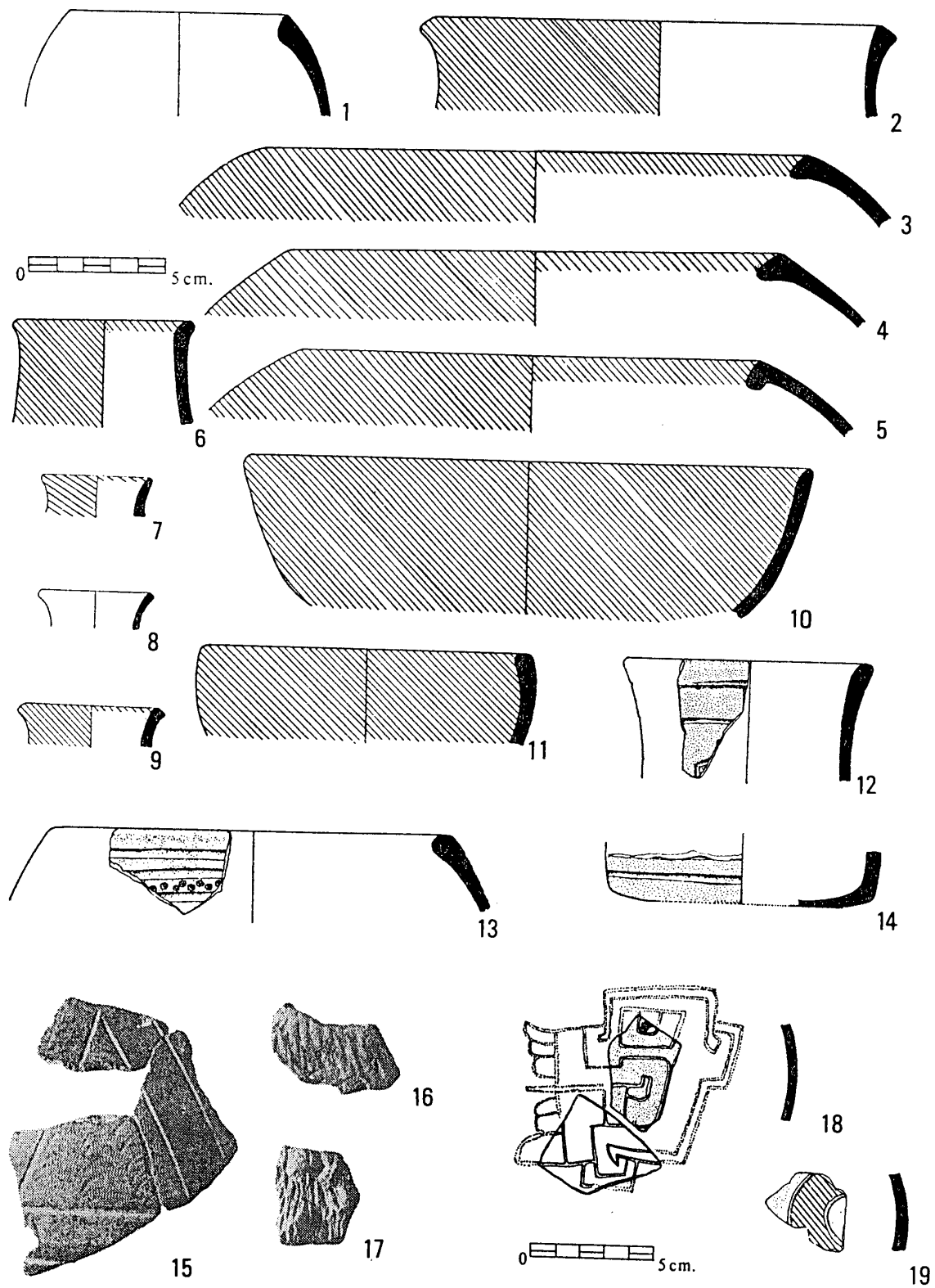


Fig. 6 B 5~7区11層出土の土器

1, 8 ; P I類 2~7, 9~11; P II類 13; D I類
 12, 14; D II類 15~17; D V類 18, 19; 搬入土器

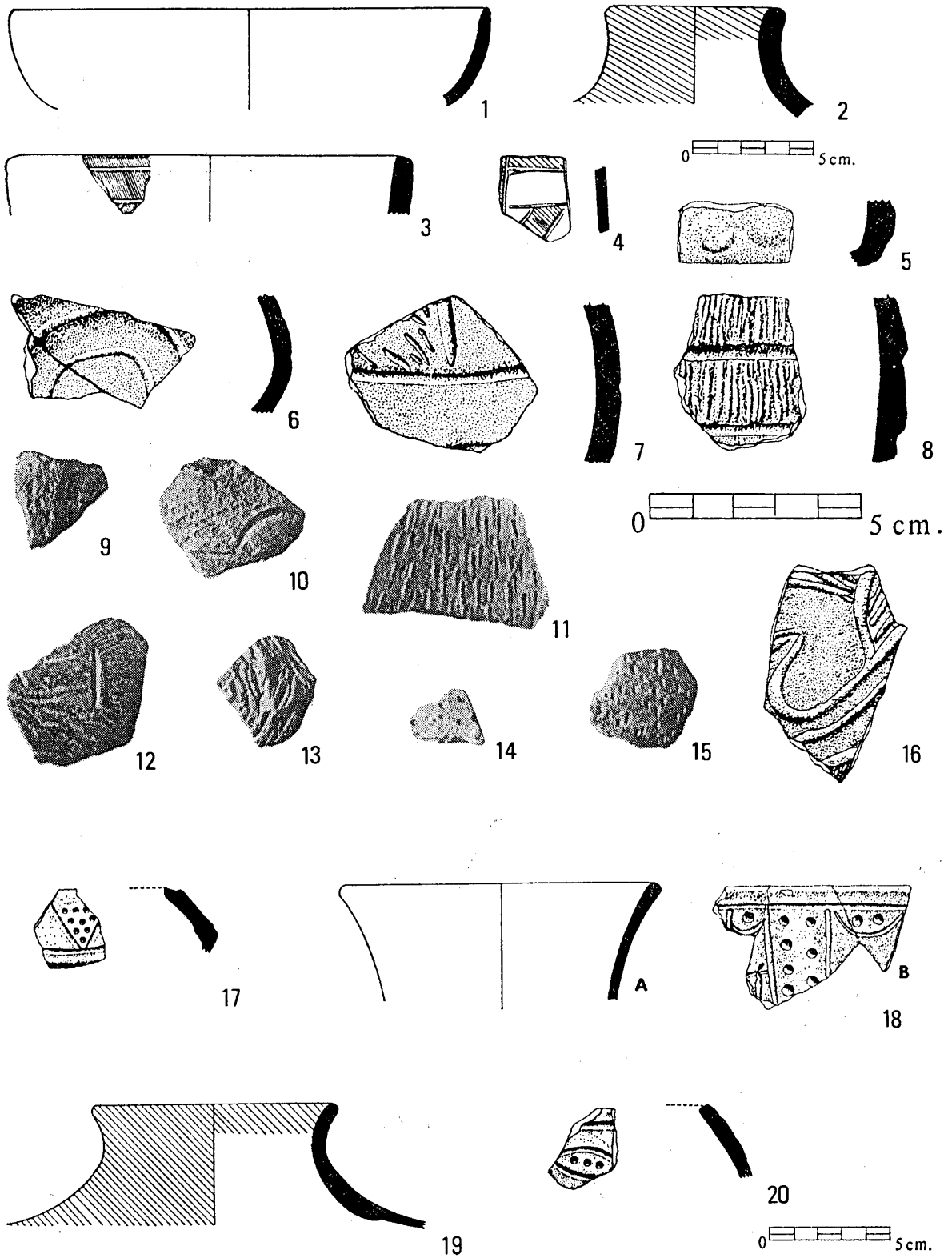


Fig.7 B 1~3区6層, B 8・9・10区出土の土器
(1~16) (20)(17,18)(19)

1 ; P I類 2, 19 ; P II類 3 ; D II類 5 ; D IV類 6, 16 ; D III類
7~15 ; D V類 17, 18, 20 ; D I類 4 ; 搬入土器

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

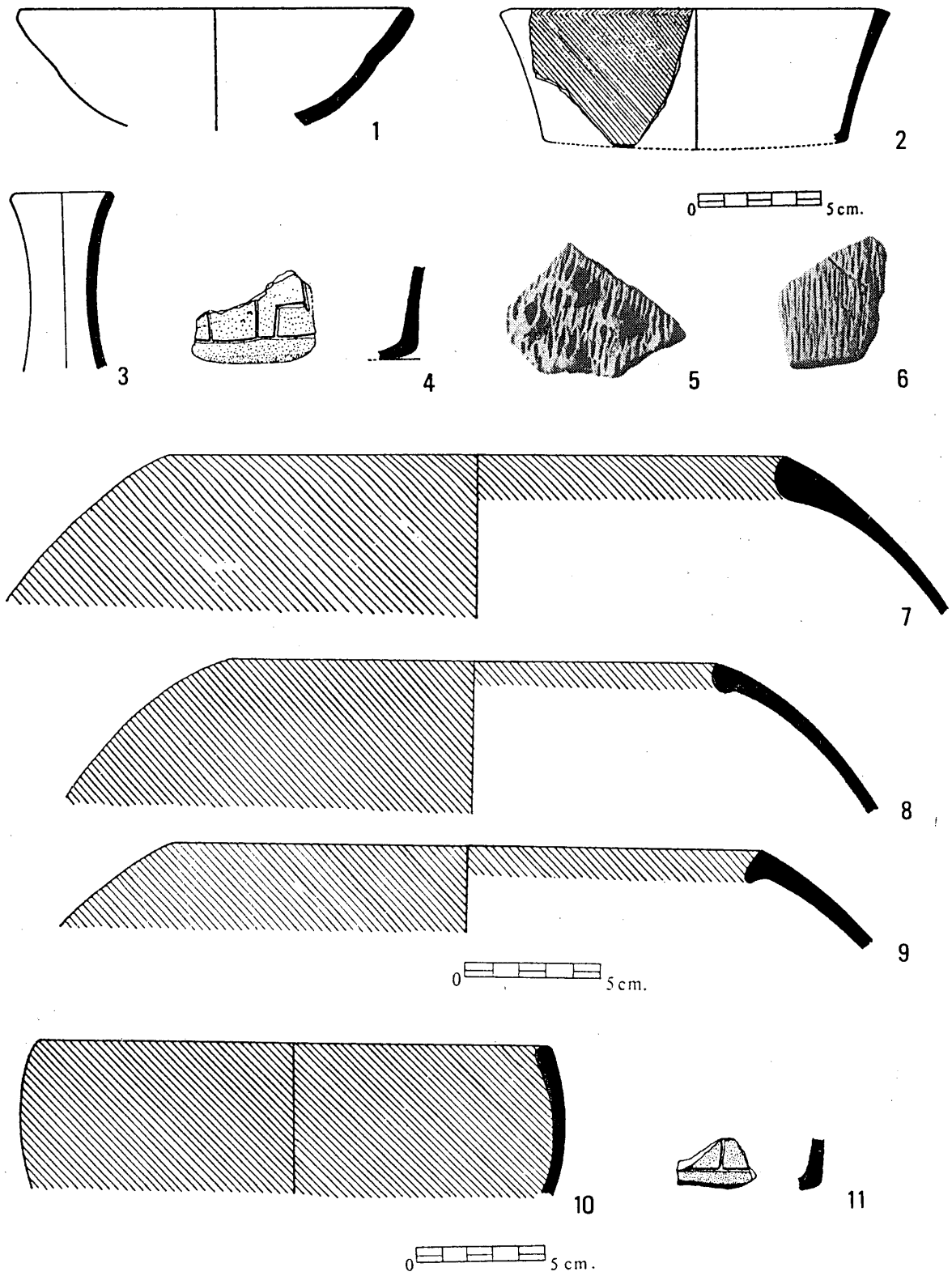


Fig.8 B 5 拡張区, B 4 区プラットフォーム上出土の土器
(1~6) (7~11)

1, 3 ; P I 類 2, 7~10 ; P II 類 4, 11 ; D II 類 5, 6 ; D V 類

層序に基づけばBⅠ群→BⅡ群=BⅢ群，内容を加味すればBⅠ群→BⅡ群→BⅢ群と考えられるが，この三群が編年上どのような意味をもつのか，このような内容の相違が何を反映しているのか等の問題は将来の課題である。さらにバーガーは，B地点の土器の中に海岸や山脈東側との関係を示すものがある，と述べているが，これについては後述したい。

<D地点の土器> (Fig. 9~13)

D地点は，四つの地点中で最も神殿に近い。この付近は，神殿近くまで背後の山の険しい斜面が迫っている。DⅠ区は新神殿の南西100mの険しい斜面の上に，DⅡ区はDⅠ区の東，斜面の下方30mに位置する。

DⅠ区では多数の遺物包含層が確認されているが，ここでは層位関係が明らかでまとまった量の資料が出ている17層，9層，10層を主に扱う。他層及びDⅡ区は後で触れる。なお，DⅡ区は層序が不明で出土量も多くないので，一括する。

17層にはPⅠ類~DV(V)類まで全てがみられるが，PⅠ，DⅢ，V類が圧倒的である。文様は全体的に幾何学的な要素が極めて少ない。DⅢ類は，いずれも小片で全体像は把めないが，チャビン文化に典型的な猫科動物の目やその他の体の部分を表した例があり，チャビン文化の特徴である様式的または具象的な文様が曲線(+地文技法)で描かれているものと思われる。全てHとC胴部片である。DV類はDⅢ類と組み合わせられている可能性もある。種類，数量共豊富で，ロッカー・スタンピング(19)，櫛搔(+小瘤)(16)，鋸歯状具の押圧(12)，刺突(14)，格子(13)等がみられる。やはりHとC胴部である。またDV類と覚しきものがあるが，一点は押捺ではなく刻線による圀点文(20)，もう一点は印捺か削り取りによる動物の足(?)とされており(21)，DV類とは確定できず保留とした。しかし，文様要素としては明らかにDV類につながるものである。器種がわかるのは主に無文のもので，M，T，C(含鏡型注口壺)，Hがあるが，特にCとHに器形上の大きな特徴が認められる。まずCは肥厚はないが口唇の外突が顕著になる(6~8)。Hは口唇が内または外に肥厚すると共に楕円形や外斜の口唇がみられる(13，19)。器面はいずれも整形痕を残さず光沢をもつ高度な磨研が施される。

9層にはPⅠ，Ⅱ，DV，V，VI類がある。全体として赤色スリップが付くものは少ない。PⅠ類はTが主体であるが，頸部が長く外反するものが多い。その他にC(鏡型注口壺)とHがある。Cは口唇の外突と共に頸部の中張りが顕著である。PⅡ類はいずれも口径30~40cmの大型のHで，これの口縁下に貼付帯が付されたものがDV類である。器面内外全体に赤色スリップがかかり，口唇が外へ大きく肥厚するH(鉢)がこれの典型である。貼付帯上には斜めの刻みが施されたり，グラファイトが塗られたりすることがある。DV類は種類，数量共少なくなり，櫛目，櫛搔等がHやC胴部に施される。DV類は，印捺文がMにも付けられる例がある(13)。この他に，特徴的な内外肥厚口唇をもつH(鉢)がみられる(8，14)。いずれも入念な光沢磨研が施される。

10層も，やはり赤色の土器はわずかである。PⅠ類にはM，T，C(含鏡型注口壺)，Hがある。Mは口唇の内突，肥厚が著しく(1)，Cも口唇の外突が顕著である。有文のものは図示が少な

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

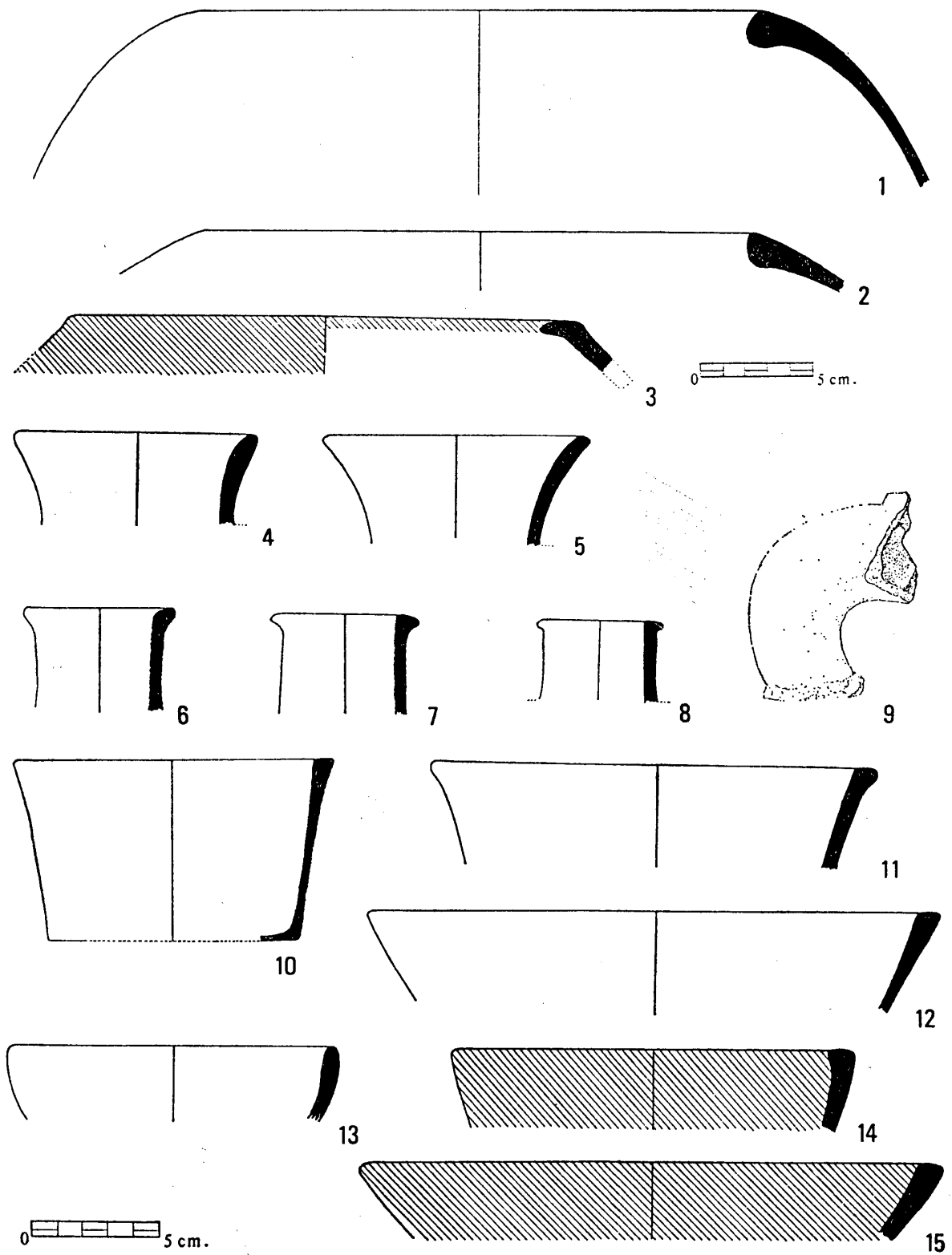


Fig.9 D 1区17層, 18層出土の土器

(6, 14)

3, 14, 15; P II類 他全P I類

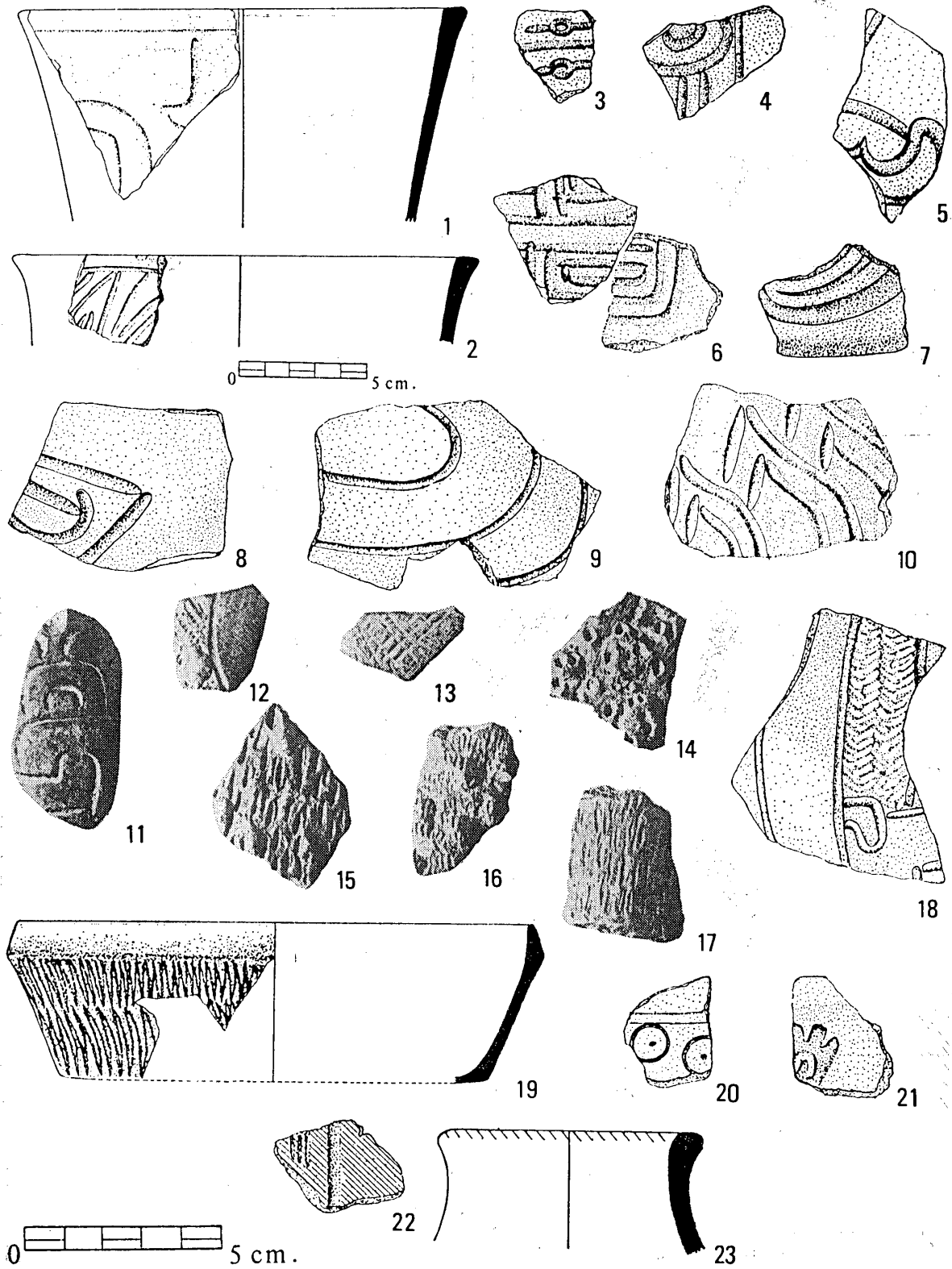


Fig. 10 D 1区17層, 18層出土の土器
(2, 3, 7, 18)

1, 2 ; D II類 3~11 ; D III類 12~19 ; D V類
20, 21 ; D VI類? 22, 23 ; 搬入土器

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

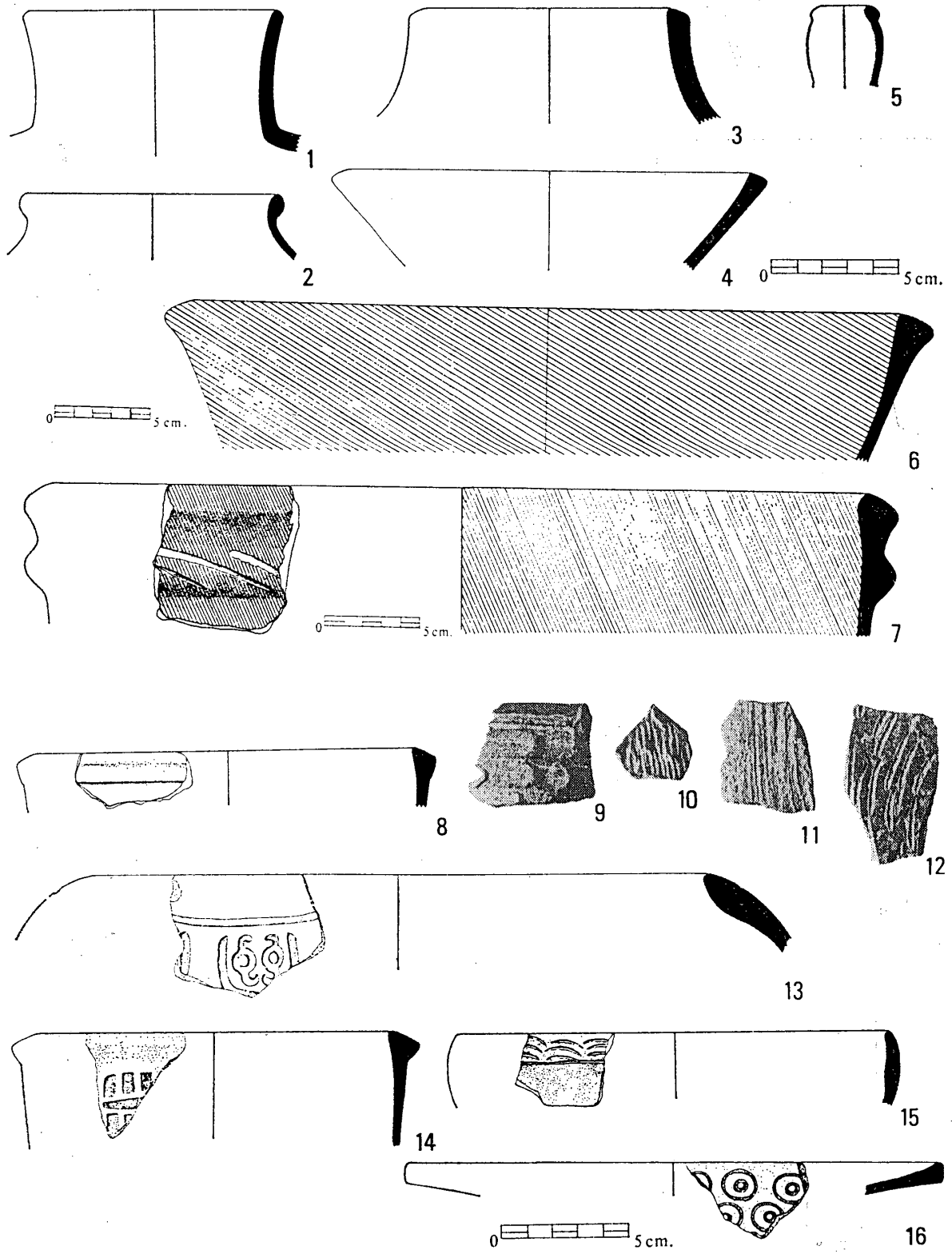


Fig. 11 D1区9層出土の土器
 1~5, 8; P I類 6; P II類 7; DV類
 9~12; DV類 13, 14, 16; DV類

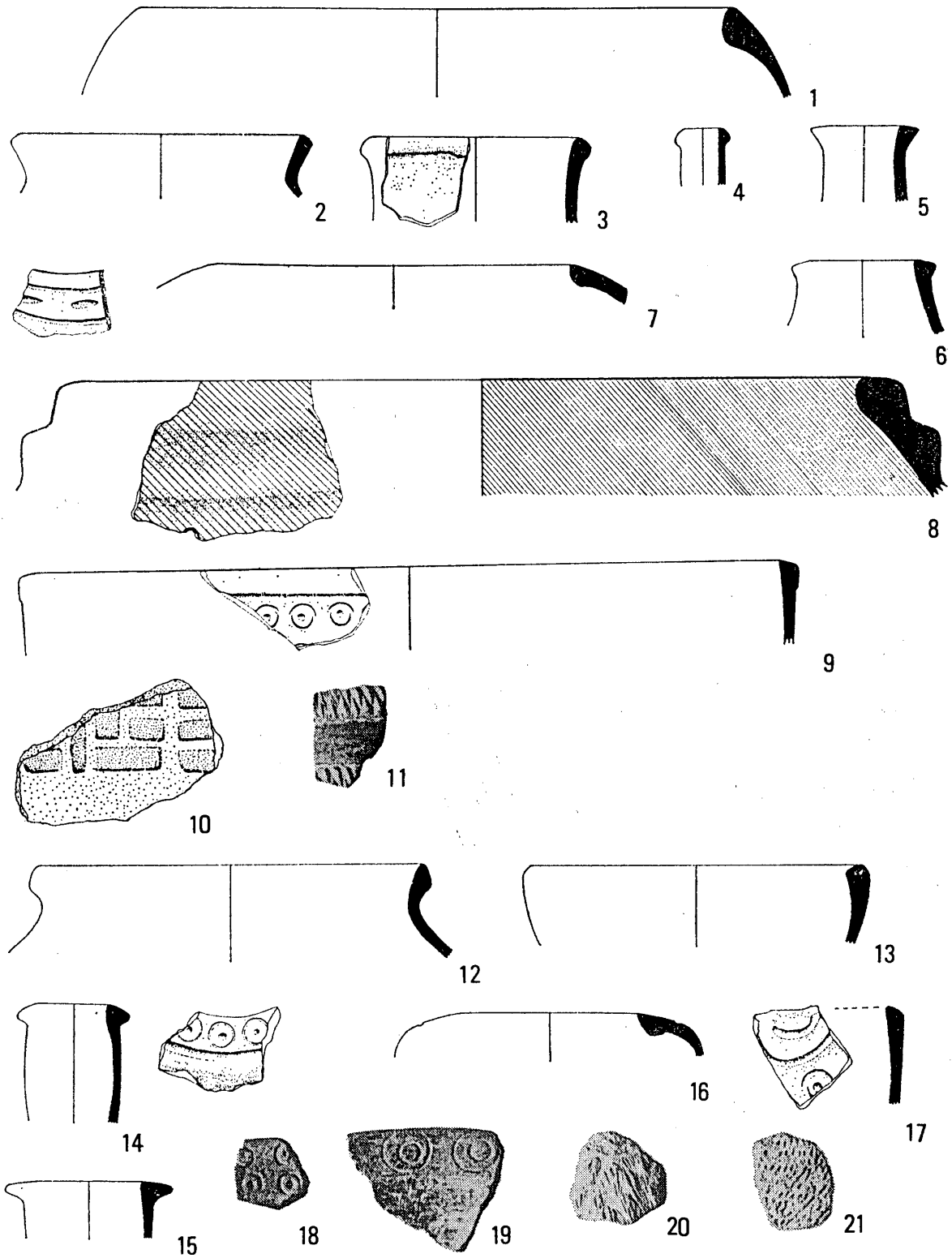


Fig.12 D 1区10層, D 2区出土の土器 (縮尺不同)
(1~11) (12~21)

1~6, 12~15; P I類 7; D I類 8; D V類
9, 10, 16~19; D VI類 11, 20, 21; D V類

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

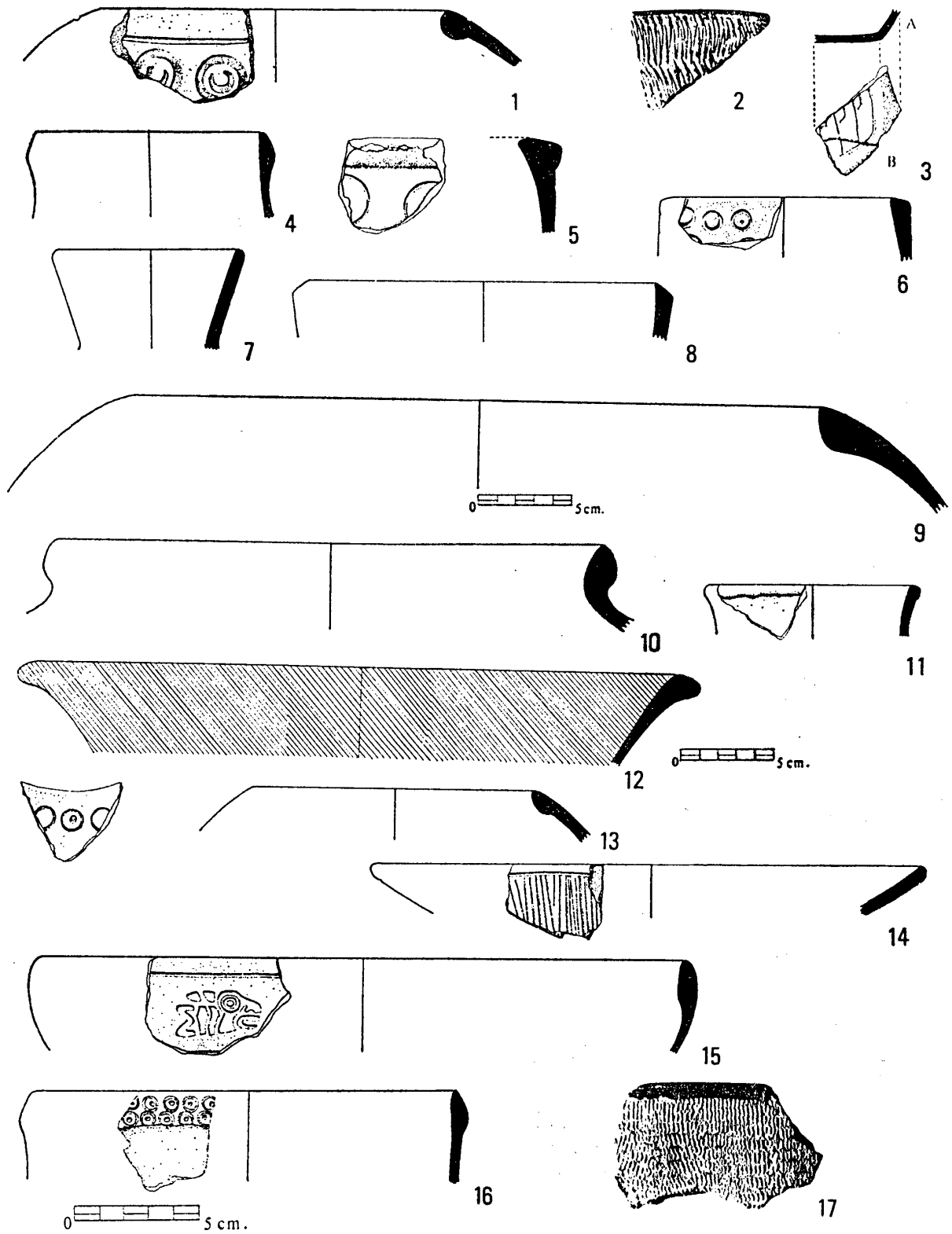


Fig. 13 D 1区19層, 12層, 11層, 8層, 7層, 3層出土の土器
 (16, 17) (13~15) (9~12) (7, 8) (2~6) (1)
 4, 7~11; P I類 12; P II類 3; D III類
 2, 4, 17; D V類 1, 5, 6, 13, 15, 16; D VI類

く、DⅣ類は赤色スリップ付きの大型鉢、DⅤ類はロッカー・スタンピングや鋸歯状具の押圧、DⅥ類は押捺圈点文が特徴的な口唇をもつHに付けられている(9)。

その他の層では、18, 16, 19, 12, 11, 8, 7, 3層出土のものが図示されている。18層は、17層中のレンズ状堆積で、PⅠ, Ⅱ, DⅢ, Ⅴ類がみられる。有文のものは小片が多いが、様式文(+地文技法)が目立ち、器形特徴もやや強調されている。これらの特徴は、17層と共通しており、内容は17層と同じと考えられる。16層はHの底部一点しか図示がない。他の層はPⅠ, DⅤ, Ⅵ類が圧倒的で、印捺による動物文(15)や刻線による翼部(3)が描かれる例がある。器形特徴はMの口唇の肥厚、内突、Cの外突口唇、H(碗)の楕円形の口唇、H(鉢)の外斜口唇や内外に肥厚する口唇が特徴的にみられる。

D2区ではPⅠ, DⅥ類が主体を占める。PⅠ類はT, C(含鏡型注口壺), H(碗)が図示されているが、T, Cは口唇が外突、Hは内突する。DⅥ類は二重円文、圈点文がHの内外に施された例がみられる(16~19)。

D地点の土器は、D1区18層、17層とそれよりも上層、D2区とで内容が異なっている。下層では曲線文が主体で他に地文技法も豊富であるが、器形特徴はさほど顕著ではない。しかし上層とD2区では押捺文が主体となり、器形特徴が著しく強調される。したがって、内容的にみて上層と下層は分離すべきであり、両者は異なる文化に属するものと考えられる。バーガーも下層をチャキナニ相、上層をハナバリウ相として、前者から後者が派生したと考えている¹¹⁾。しかし両者間の差異は大きく、下層から上層へ直接結び付けることは難しい。たとえば、曲線による様式文から押印捺文へのつながりが認められない。したがって、もしも下層と上層が関係があるとしても、間に複数の発達段階が介在すると思えなければならない。両者の中間にある16層は遺物が少なすぎるため、バーガーの資料ではこの間を埋めるものがない。それゆえ、ここではD1区18, 17層(下層)の土器をDⅠ群、D1区16層より上層とD2区の土器をDⅡ群と設定する。両者の間にはある程度の時

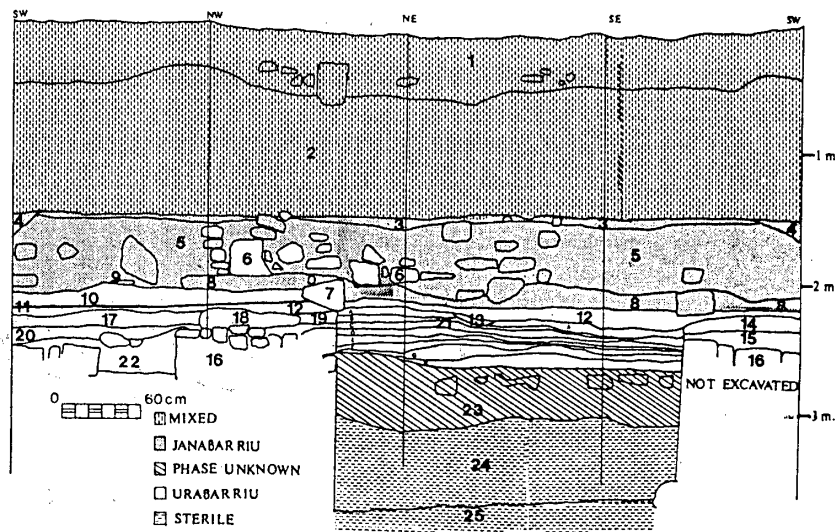


Fig.14 Unit E1 セクション図

間差があることは認められるが、内容的な関係はこれだけでは決定できない。

〈E地点の土器〉 (Fig. 15—16~22)

E地点は旧神殿の北西140mのところであり、一ヶ所のみ1.5×1.5mという狭い範囲で発掘調査が行なわれた。ここで確認された層位は複雑で、床の重なりや石壁も出ている。しかし、図示されている土器はごく少なく、それらの出土層位も23, 12, 8, 5, 2層と限られている。しかもこのうち23層と12層のものは各々一片のみにすぎない。バーガーによれば、23層の土器片は貼付文上に刻線が施され、C胴部である。この他に、この層からはバーガーのいうウラバリウ相の特徴的なC, M, Hの破片が出土しているという¹²⁾。また12層のものは、刻線で翼様の文様が描かれており黒と赤で色分けされているC底部である。この層からは他にハナバリウ相の土器片が出ているとしながらも、バーガーはこの一片をチャキナニ相に入れている¹³⁾。

いささか細かいことではあるが、層位図 (Fig. 14) を見ると、バーガーが本遺跡で最古相だとしているウラバリウ相の下に phase unknown とされる堆積があり、より下層の文化層の存在が示唆される。しかしこの層は23層で、彼のいうウラバリウ相の土器が出土している層である。さらにウラバリウであるという12層からチャキナニやハナバリウの土器が出ているが、ウラバリウの土器の有無に関する記載はない。これを一体どう解釈すべきか？ バーガーはE I区はこの堆積を根拠にウラバリウ→ハナバリウを主張しているが、そのまま認めることは危険であろう。その他にも記述にあいまいな点がいくつかみられる¹⁴⁾。

もう一つの問題は、ハナバリウ相の石壁の直下にこれを境に東半に粘土の貼床の重なり、西半に石の基壇があるが、両者の関係がわからないことである。石の基壇の下は、丸石混じりの茶色の粘土で遺物は出土していない。この土は地山なのか、それともこれと対応する層があるのか？

8, 5, 2層の土器は、D III, V, VI類が図示されている(16~22)。特にD VI類が圧倒的で、Hに施されている例が最も多い。内外に肥厚する口唇をもったH (17, 18) の他、外斜口唇や楕円形口唇もみられる。器面は整形痕が残らない入念な磨研が施されている。これらのことから、上層の内容はD II群に比定できると考えられる。

E地点の土器は、8層以上のものはD II群とできるが、それより下の層についてはB I~III群、D I群が存在する可能性があるとするにとどめておきたい。したがって、とりあえず8層より下の層をE I群、8層以上をE II群として分離しておく。同一相内で何度か建て替えが行なわれることもあり、建築段階と土器文化段階とは必ずしも一致しないが、しかし一応の建築段階とそれに伴う遺物群は明確に把握しておく必要がある。

〈小括〉

B地点の土器は、I群からIII群まで変容しつつも明らかに連続性があり、一つの文化と認めることができる。しかし他方で、各群中に他地域との関係を示すものが含まれている。B I群ではまず外反鉢があげられる。この特徴的な器形は山脈東側のコトシュ遺跡 (Fig. 1) の先チャビン文化期、コトシュ期のものと関連づけられ、バーガーはB 9区出土の一例を搬入土器の可能性があると考

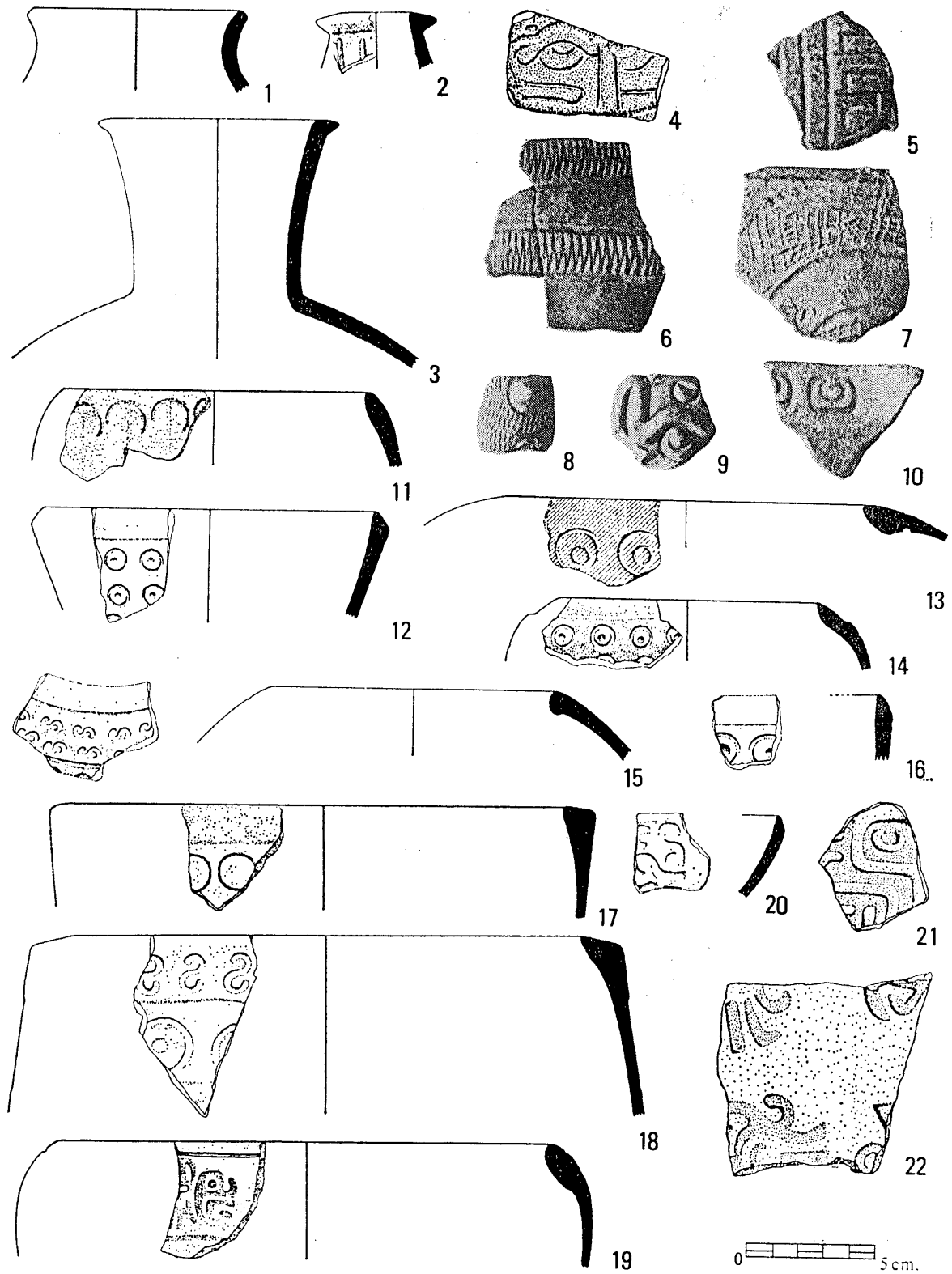


Fig.15 A区, E1区8層, 5層, 2層出土の土器
(1~15) (16~22)

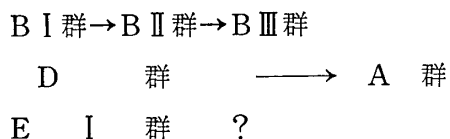
1~3; P I類 5; D II類? 4, 9, 21; D III類
6~8; D V類 10~20, 22; D VI類

ている (Fig. 7—18)。これについては後述する。けれども、B I 群のもう一つの特徴である地文技法、特にロッカー・スタンピングや櫛搔+小瘤、鋸歯状押圧等はコトシュ期にはみられないもので、さらに別な起源地を示唆していると思われる。B II 群では、バーガーは曲線文に赤彩を塗りわけたC胴部片(?)と中央海岸、特にクラヤク遺跡出土のものとの類似を指摘している。また北海岸クピスニケのものとする猫科動物の目や口を表した例も示されている。その他、地文技法の中にも北海岸をおもわせるものがみられる (Fig. 6—15)。B III 群には赤と白のスリップを塗りわけた小片があるが、地域は特定されていない。またB III 群では初めて様式的な曲線文が出現する (Fig. 7—6, 16)。B 地点には前後の文化層は確認されず、この文化期のみのおそらく居住址らしい。

D 地点では I 群と II 群の二つに内容が分けられたが、この二群は互いに異なっていて、時間差もあり、かつ各々 B 群ともまた違ったものである。D I 群は曲線文と地文技法を特徴とするがいずれも小片で、出土総量そのものも口縁部破片 107 片と少ないため、全容を把握することは難しい。しかし、その現われ方は突然の感がある。B 群との関連は、特に文様に関してはごく弱く、他地域からの流入の可能性が考えられるが、それは今後の課題である。さらにデータの集積が望まれる。一方、D II 群、A 地点、E II 群が共通の内容を有していることは文様、器形特徴から明らかである。それゆえこれらをまとめて A 群とし、したがって D I 群は D 群とする。D 群と A 群の間には層位的にも内容的にも先後関係が認められるが、一連の変遷過程として把えるにはまだかなりの段階が欠けている。

B 群とこれらの関係は今一つはっきりしない。B 群と A 群の層位的重なりが認められたとされる E 地点は、E I 群の内容が不明瞭で十分な根拠とはなっていない。しかしながら、器形特徴 (次第に強調されていく傾向) や、E I 群に B 群の特徴をもつ諸器種があるという記述から考えて、B 群が A 群よりも時間的に早い位置に来るものと思われる。

したがって、バーガーの資料は一応以下のようにまとめることができる。



今後の課題は、B 群と D 群 → A 群との関係を明らかにすること、D 群の起源の解明、D 群から A 群への変遷過程の追求、各土器群と遺構との関係の把握、といったことであるが、特に問題となるのは E 地点であろう。まず遺構間との関係を明確に把え、それに伴う遺物から各土器群の関係を確定していかなければならない。調査範囲の拡張か、付近での追調査を考える必要がある。

(b) L. G. ルンブレラスと H. アマトの資料

これまでに多くの地下回廊や小室等を発掘調査しているが、提示されている資料はそのごく一部にすぎない。したがってここで扱う資料も、出土土器が多少なりとも図示されている三ヶ所のものに限られる。すなわち、オフレンダス・ギャラリー、ロカス・カナル、R 区の H 層である (Fig. 2—2)。どの地点においても層位は分けられず、また堆積状態と出土土器の関係についての記載も

ない。

ルンブレラスらは、神殿建築内の構造物と土器文化 phase とを結び付け、特にオフレンダス・ギャラリーとロカス・カナルから出土したものをそのまま二つのグループとし、また搬入土器として三群を設け、それらの先後関係を定めることによって編年をしようと試みているが、いずれも成功していない。しかし、前者がおそらく奉納場所と思われる地下回廊、後者が排水溝、という遺構の性格を考えると、様々なものが混在している可能性が出てくる。したがって、まず各遺構毎にその内容を分類整理してみる必要がある。すなわち、一地点出土のものを一群として編年上の位置を与えてよいものか、検討してみなければならない。また、分類した小グループ毎にその位置付け、グループ間の関係を把握していく必要がある。

<オフレンダス・ギャラリーの土器> (Fig. 16, 17)

R区内北側を東西に延びる地下回廊である。主に第3室、一部第1室出土の土器が提示されている。写真のみのものもかなりあり、データは必ずしも充分ではない。

土器は、文様、器面調整、胎土から大きく二つに分けられる (Of I 群, Of II 群とする)。

Of I 群は、太めの曲線刻文による様式文 (D III 類) に地文技法 (D V 類), 貼付文 (D IV 類) が組み合わされる。灰色～黒色で入念な光沢磨研が施される。Of II 群には、Of I 群以外の多様な土器が含まれる。いずれもルンブレラスらによって搬入とされている (モスナ, ワチェックサ, ラクと呼ばれている)。ほとんどが写真のみの提示で、文様や器形の詳細は不明である。主として赤色の器面や赤彩の使用、胎土の相違によって、Of I 群と区別されている。これらの土器は将来再検討されねばならない。

Of I 群は文様によってさらに細分されるが、各々地文技法を伴うものと伴わないものがヴァリエーションとして認められる。

Of I-1 ; 具象的な文様—猫科動物, 猛禽類等。目と眉, 足, 口の描き方に共通の特徴がみられる。全て横向きで大きく非対称に描かれ, 器面内外に施文されることもある。器形の強調はみられない。

Of I-2 ; やや様式化される—複数の文様要素が組み合わされて何が描かれているのかわかりにくくなるが, 顔や手足等部分部分は識別できる。牙, 目, 翼等の一部分が強調されはじめる。大きく非対称に描かれる。器形の強調はほとんどない。

Of I-3 ; 著しく様式化される—牙と目のみが強調され, 他は複雑な曲線の連続となる (牙はさらに強調のため短刻線が入る)。非対称なデザインが器面全体を覆う。H (鉢) と C (単注口壺) がある。器形はやはり強調されず, C の胴の形が多様である。地文技法は C のみに付けられる。

Of I-4 ; さらに様式化が進み, 図形的になる—線・点対称も現われる。牙や猫科動物も依然としてモチーフとなっているが, 一方, 特に地文技法を伴うものでは幾何学文が主体となってくる。また地文技法が主, 描かれる文様が従となることもある。H

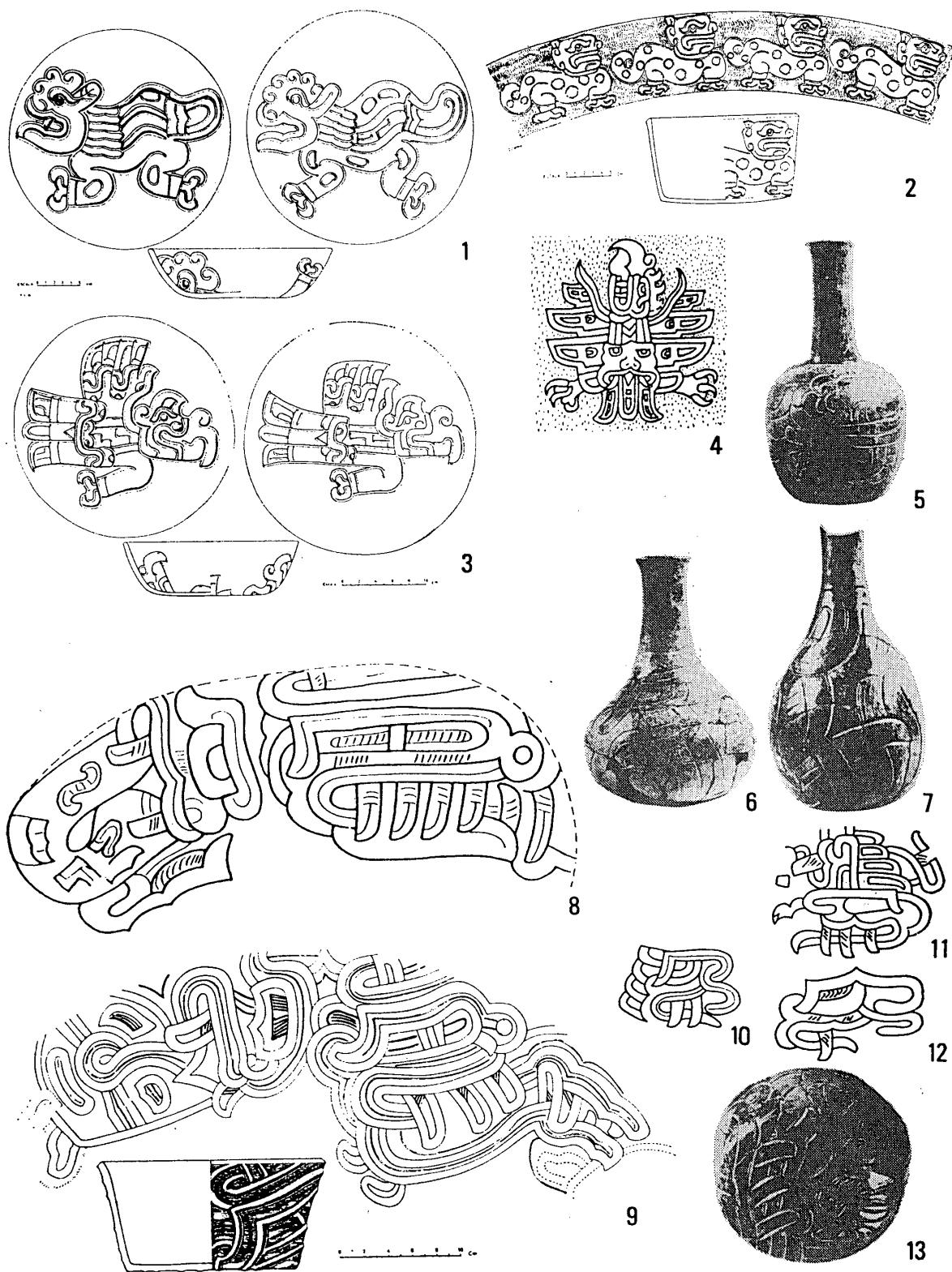


Fig.16 オフrendas・ギャラリー出土の土器
 1~3; Of I-1群 4, 5; Of I-2群 6~13; Of I-3群



Fig.17 オフrendas・ギャラリー出土の土器
 1~11; Of I-4群 12; Of I-5群

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

(鉢)とC(単注口壺)があり、共に器形の強調はみられない。地文技法は専らCに施される。Cの胴の形は多様である。

Of I—5 ; 文様要素も文様の配置も点対称になる。文様はおそらく猫科動物を表している。地文技法のかわりに押捺圈点文が地を埋めている。例数は少なく、H(鉢)が一点のみである。器形の強調はやはりされていない。

オフレンダス・ギャラリーの土器は、暗色で光沢磨研され曲線刻文を有するものが主体となる。これに地文技法が組み合わされることがあるが、それはCに多い。文様は具象文から次第に様式化され、さらに幾何学的になり、やがて押捺による文様となる。そしてこれに伴って、非対称的なデザインから対称的な図形へと変化する。文様要素としては、猫科動物、猛禽類及びその属性が中心で、特に牙が強調される。器種は単注口壺と鉢が図示されており、鑑型注口壺はみられない。器形は強調されることはない。Cの胴部には様々な形がみられる。Of I群はD群と類似した内容といえるが、D群に比して器形特徴がかなり画一的である。Of II群は、良好なデータを追求する一方、地域的な違い(搬入)と時間的な違い(先後関係)の両方から考えていく必要がある。

<ロカス・カナルの土器> (Fig. 18)

G区北西部分の地下排水溝の第二区から出土した土器が提示されている。まだ未発掘部分が多く全容は不明である。提示資料はごく少なく、全て有文である。

資料中にはD I類はみられない。D IV類は縦または横方向の貼付帯で上に刻みが付き、一種の擬縄とも思われる。赤色スリップ付きがあり、大型の鉢が含まれているらしい。D V類には、ロッカー・スタンピング、鋸歯状押圧、櫛搔+小瘤がみられる。鋸歯状押圧は、刻線または貼付による円系の文様が組み合わされる例が多い。C(鑑型注口壺)とH(鉢)が主体で、Cは口唇が外突する。D VI類は、刻線と押捺による円、圈点、同心円、三日月、J字形等が一行または不規則に配置される。H(碗)が大部分を占めるが、器形の詳細は不明である。器面調整は、光沢磨研や劣磨研等がある。D II類(?)には、様式的な文様を直線で表した赤色スリップ付きのHがある。器面内外に施文され、へびや翼様の表現がみられる。D III類(?)は、貼付による隆起曲線(D IV類)で様式的文様(D III類)が描かれ、それに地文技法(D V類)が伴うこともある。灰~黒色で磨研されている。鑑型注口壺で口唇は外突し、頸部や鑑部にも文様が付く。

ロカス・カナルの土器には、D IV類を除いて全てにD群、A群両方の、あるいはどちらとも判断し難いものが含まれている。これらは分離困難な状態で混在しているため、ここではあえて分けることはせずに文様分類だけにとどめておく。特にD、A両群の特徴を合わせもつような例(D II、III類?)はD群とA群をつなぐ資料の一部になる可能性もあるが、まだ Of I群と直接には結びつかない。今後の資料の公表と増加を待って再検討したい。

<R区H層の土器> (Fig. 19)

円形広場の東端部で確認された最下層で、ルンブレラスによってチャビン期と認められたものである。図示されているのはわずかに7片で、全容は不明である。P I、D III、VI類がみられるが、

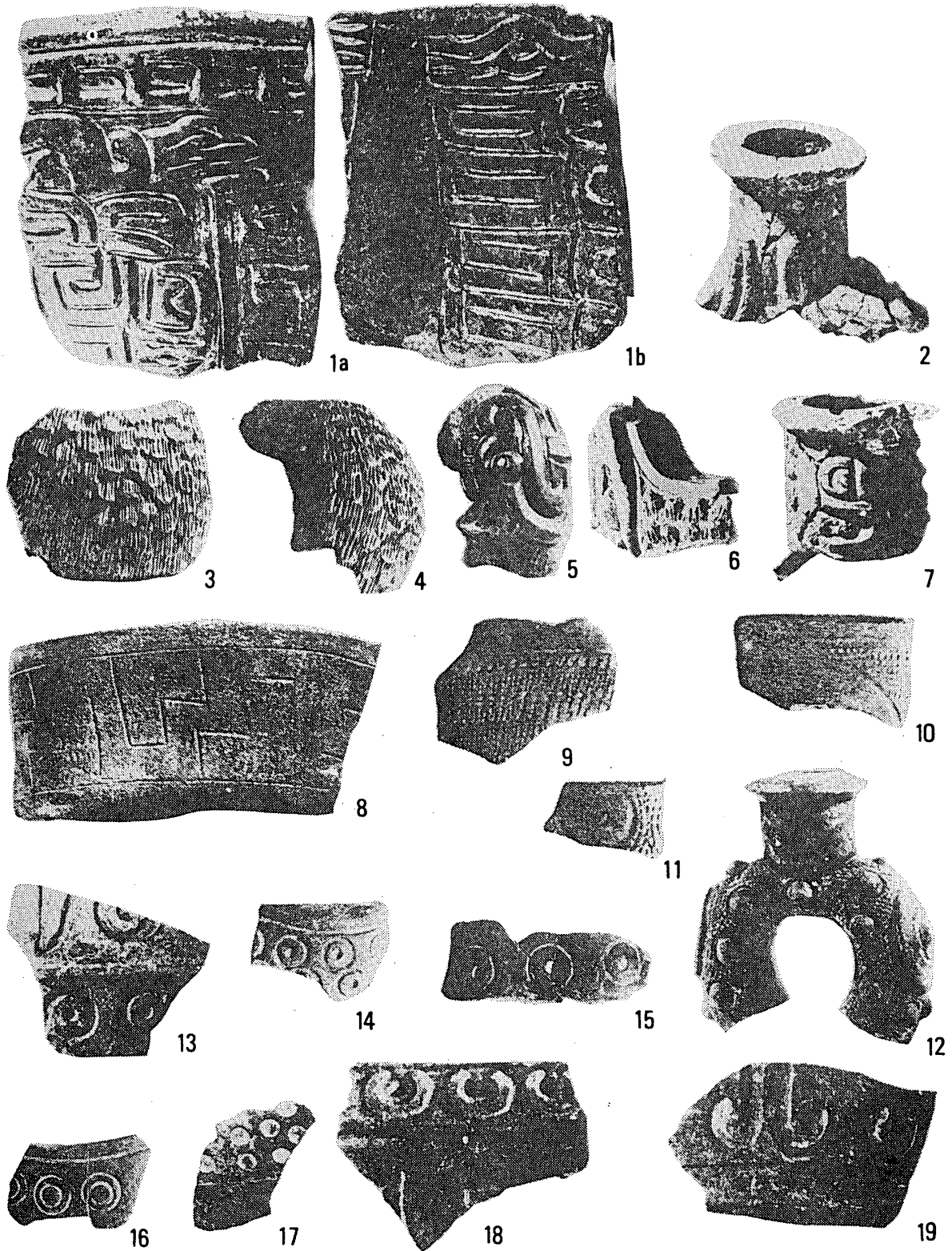


Fig. 18 ロカス・カナル出土の土器
1; D II類? 2, 5~7; D III類?
3, 4, 8~12; D V類 13~19; D VI類

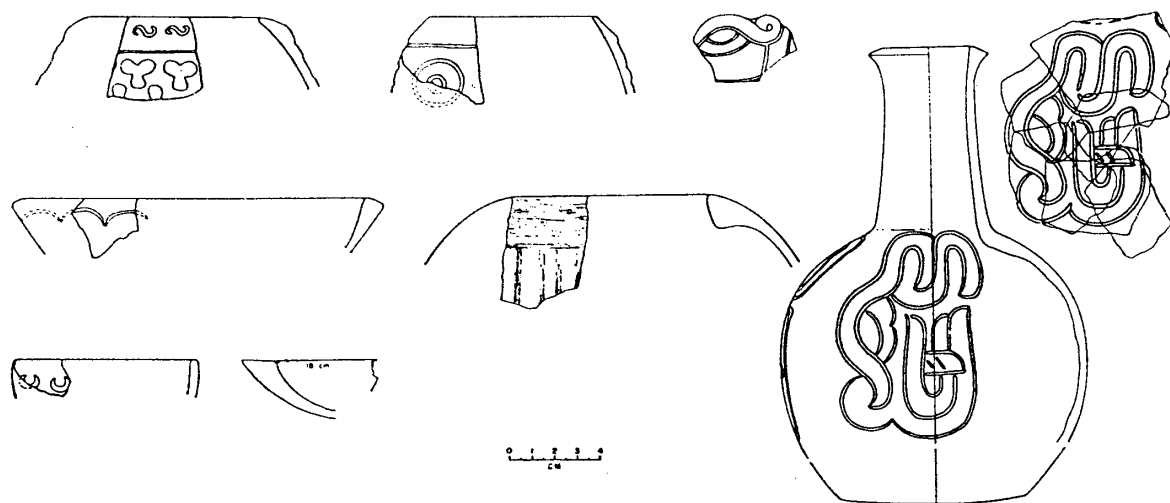


Fig. 19 R区H層出土の土器，テ=ヨ発掘資料の復元図 (Fig. 21 参)

D VI類が多い。D III類は曲線刻文で、(猫科動物の?) 目を表すが、類例はA群にもある (Fig. 15—4)。その他は、器形特徴、特に口唇形や内外への顕著な肥厚から、A群に比定できよう。

<小括>

オフレンダス・ギャラリーには、大きく分けてチャビン・デ・ワントルで製作された土器 (Of I 群) と、おそらく搬入された土器 (Of II 群) の二群が存在する。うち前者の資料から、D群の中での変遷をある程度把握することが可能となった。この変遷においては、器形特徴や器面調整はほぼ一律で、文様のみが変化していく。一方、器種と文様との関係からみると、H (鉢) は全体に地文技法が少なく、文様は非対称の具象文から様式化して対称的な図形的文様へと変化する一方、C (単注口壺) は地文技法を伴う例が多く、具象文から地文技法を強調した幾何学的文様へと変化していく。この傾向は、ロカス・カナルの土器にもみられ、C (鏝型注口壺) に地文技法を伴うもののがかなり存在する。バーガーのD群は資料がそもそも少なく、この様な変遷の様々な段階のものが含まれているものと思われる。

D群は、おそらく Of I 群のような変遷過程を辿り、あるいはロカス・カナルの一部のものにみられるような過渡的段階をも経て、H層のような押印捺による幾何学文をもつA群へと続いていくのかもしれない。しかしその間にまだいくつかの段階が介在するはずである。さもないと、文様、器形の変化はもとより、たとえばHの器面全体に施文されていたものが胴部上半に文様帯を形成するようになる、といった土器に対する“思想”の変化が説明できない。

ルンブレラスらの資料はまだ未公表分が大量にあり、今回はわずかな資料だけに基いたもので、いずれ機会を改めて再検討しなければならないが、ここではこれらの資料の関係を、以下のように一応一線的な変遷過程として把握しておくことにする。

Of I—1 → Of I—2 → Of I—3 → Of I—4 → Of I—5 → …… → ロカス・カナル (一部) → カナル H 層

(c) J. C. テーヨの資料 (Fig. 20~23)

テーヨは二度にわたって神殿区域の発掘を行なった。そして、明らかに神殿建築と認められる部分をA~Fに、周辺のプラットフォーム部分をa~hに分け、その中で地点発掘をしている。

土器はCH/1~CH/134で発見された。このうちCH/1~4はE, CH/42~134はA, Bとhに位置する。資料と層位の対応関係は明確でない。

資料はまず無文と有文に分けられ、器面の色の違い(暗色と赤色)や文様によって分類されている。器種は別図に表され、各群中のヴァリエーションとして扱われている。

テーヨの資料にはPI, II, DI~VI類の全てが混在している。PI類にはM, H(碗, 鉢), C(鏡型注口壺)が含まれる。M, Hの口唇は内突し、碗には楕円形の口唇もみえる。鏡型注口壺の口唇は外突する。この他に一点、鏡型注口壺に完形がある(Fig. 20—1)。黒色磨研で球胴平底、頸部はわずかに凹湾、口唇は外斜、鏡部は楕円形で太い。

P II類はレンガ色を呈するが、酸化焼成による場合と赤色スリップがかけられる場合とがある。M, T, Hがある。赤色は無・有文全体を通じて少量である。

DI類は、三角形、四角形、ラグビーボール形等の幾何学的な区画の中に刺突が充填されているが、刺突には大きめの正円形から小さくて不規則な粗いものまである。黒色と赤色の二種があり、共に光沢磨研される。全てHであるが中に外反鉢が含まれる(Fig. 22—7, 8)。これらはB群のDI類と強い類似性を示す。テーヨはこれがコトシュ遺跡と関連があることを示唆している¹⁵⁾が、これらの資料は編年上重要な意味をもっているので、次章で検討することにした。

D II類は少量で、小片に付き文様全体は不明のものが多い。黒~暗色で磨研される。全てHであるが、文様と口唇形から将来細分される可能性がある。

D III類は様式曲線文が刻線または貼付隆線によって描かれるもので、各々に地文技法を伴う例がある。主なモチーフは、猫科動物の顔、牙、へびで、Of I—1群, 同3群, 同4群, D群, ロカス・カナルのものとの類似がみられ、口唇形も概ね対応が認められる。暗色~黒色で高度に磨研され、T, C(単注口壺, 鏡型注口壺), H(碗, 鉢)がみられる。

D IV類には、貼付帯、貼付区画線の他、鳥?, 手等の造形もある。貼付帯付きの鉢は赤色で口唇が大きく外肥する特徴から、A群の大鉢と思われる。ヴァリエーションがあるようである。

D V類には、ロッカー・スタンピング、鋸歯状具の押圧、櫛搔+小瘤、格子文、編物を押し付けたような文様¹⁶⁾があり、刻線や貼付による円文と組み合わせられる例もみられ、多様である。先述の諸資料との対応関係を特定することは難しいが、格子文はD群に、円系文との組み合わせはロカス・カナルに存在することを指摘できる。H(鉢)が多く、外斜口唇も散見される。

D VI類は、押捺の円、圏点、同心円、不完全円、三日月、S字形、X字形及び印捺と多種ある。テーヨは、円系文は腫、印捺文は目や牙等がみえるので猫科動物の頭部、S字文はへびを、各々様式的に表現したものであるとしている¹⁷⁾。灰~黒色が多く、よく磨研されている。M, T, Hがあるが、碗に楕円形口唇、鉢に外斜口唇がみられる。

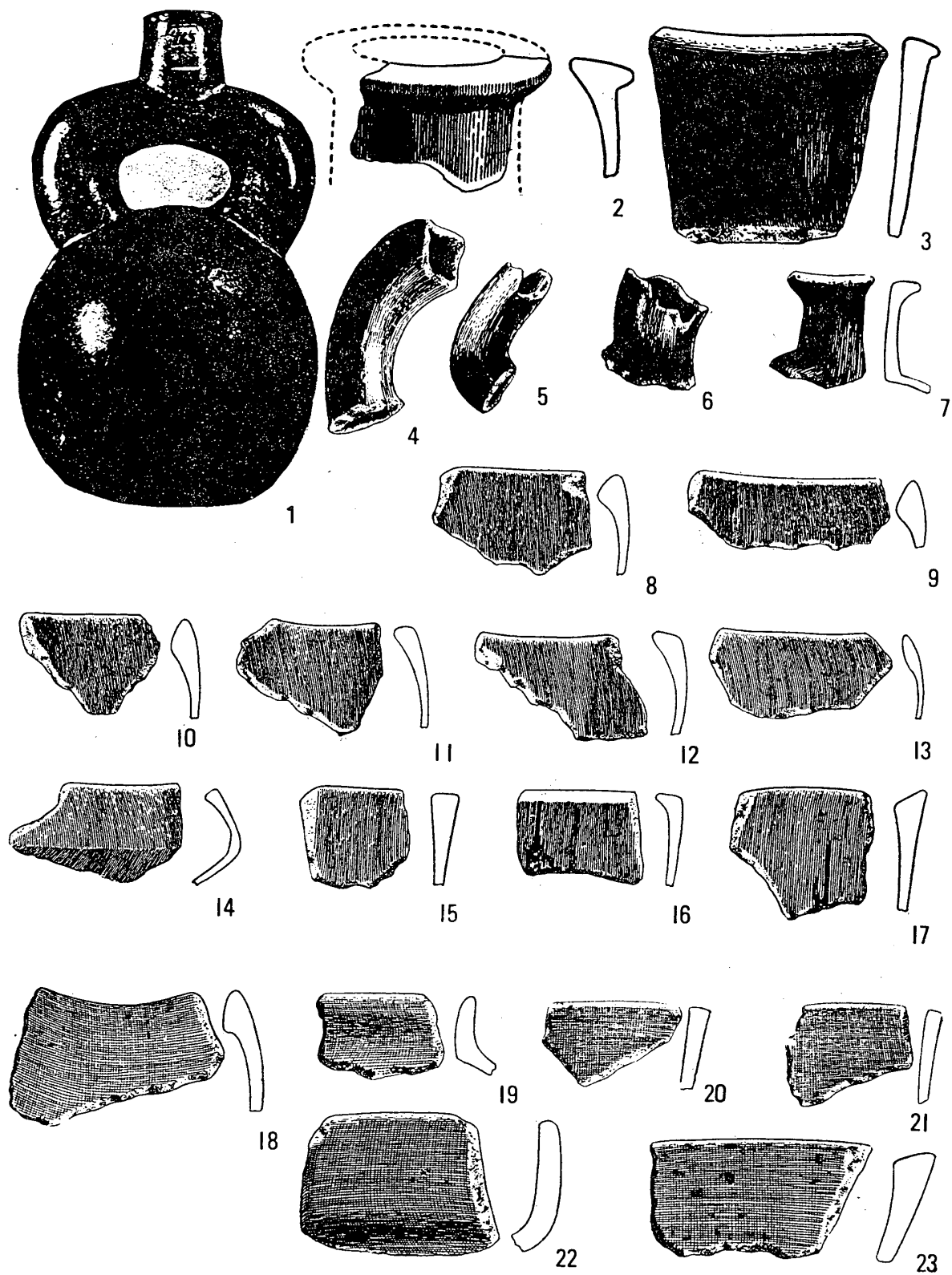


Fig. 20 神殿区域出土の土器 (テ-≡発掘資料)
1~17; P I類 18~23; P II類

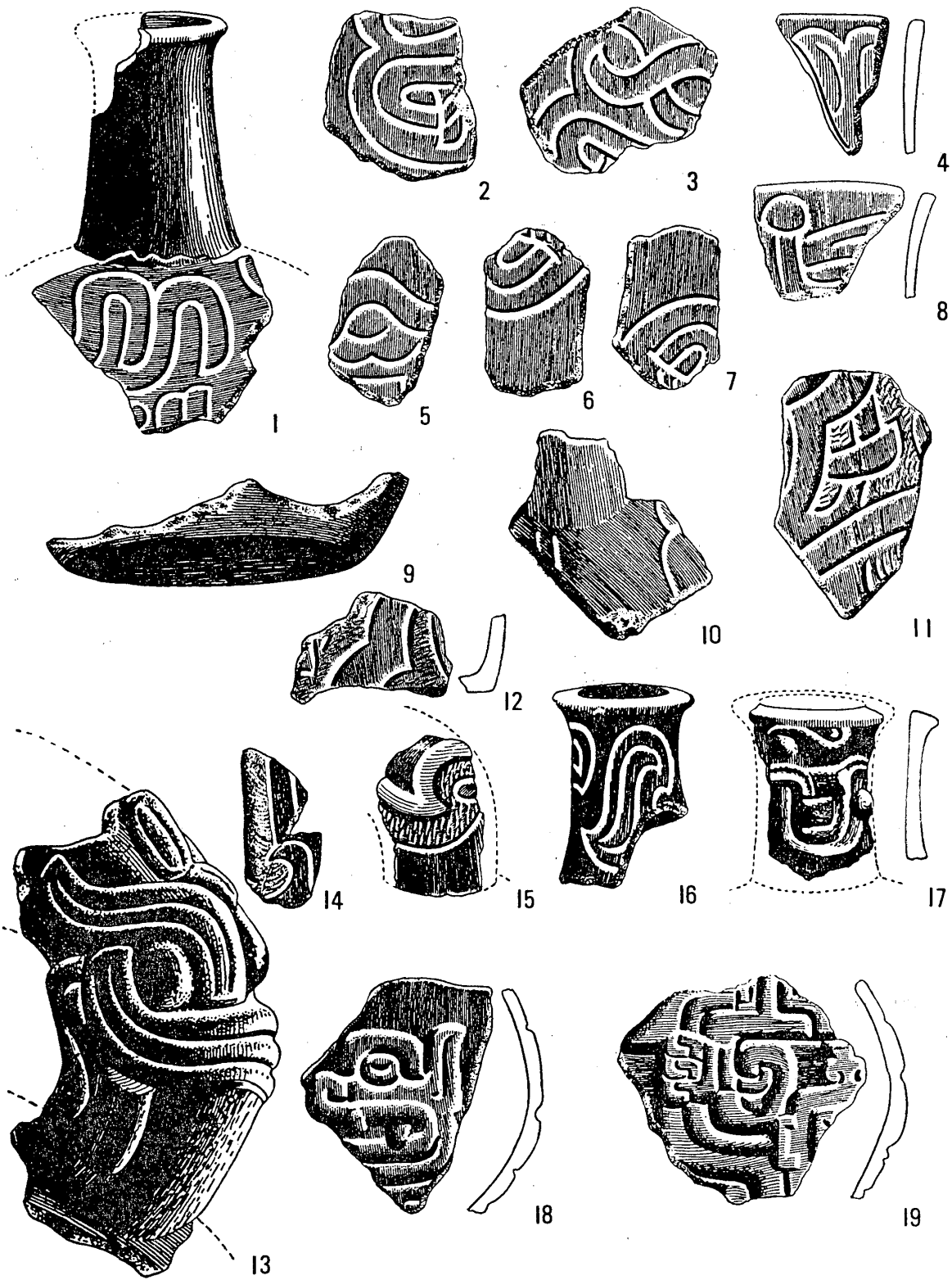


Fig. 21 神殿区域出土の土器 (テーヨ発掘資料)
1~12, 16; D III類 13~15, 17~19; D III類?

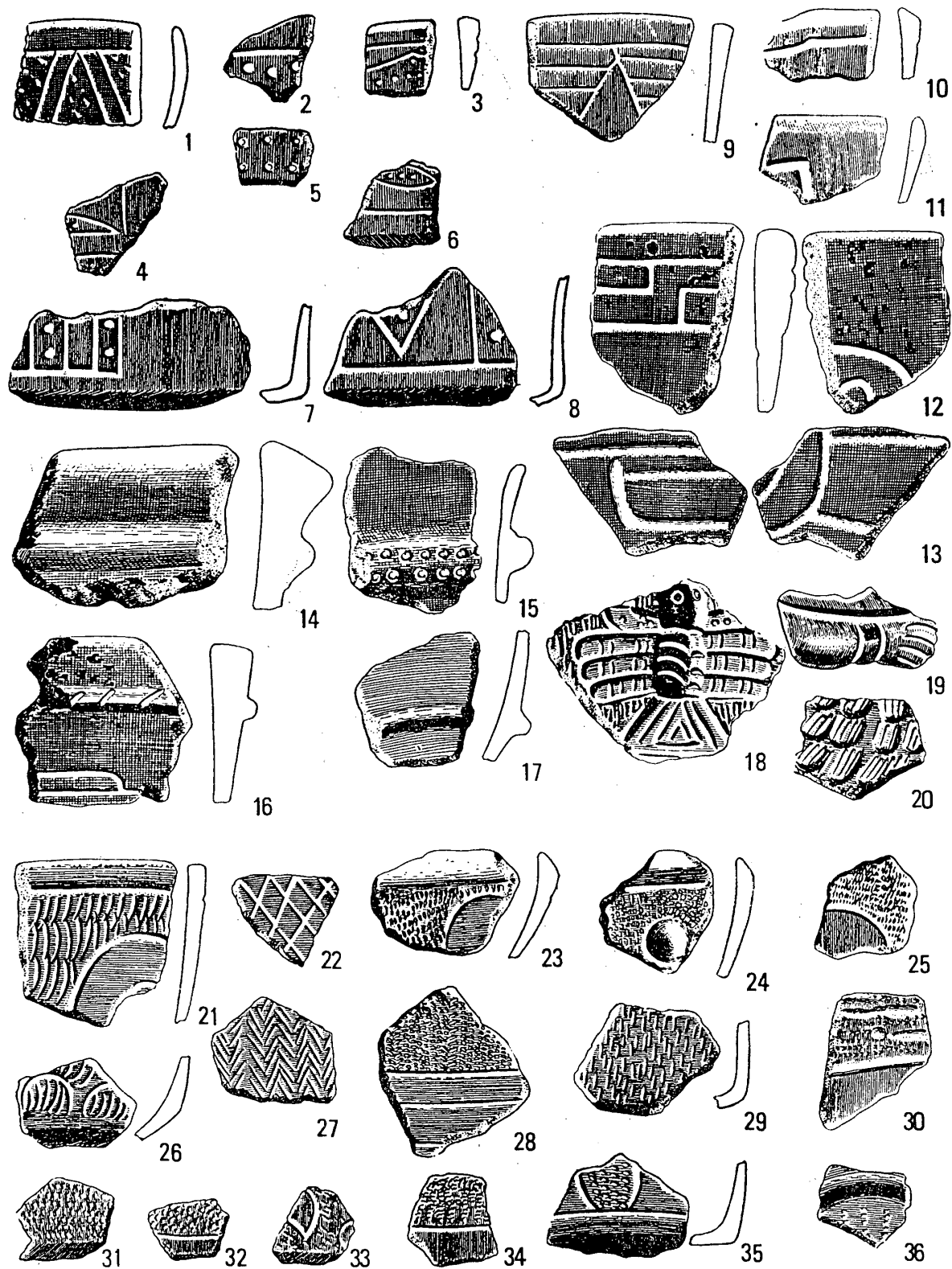


Fig. 22 神殿区域出土の土器 (テヨヨ発掘資料)

1~8 ; D I類 9~13 ; D II類
 14~19 ; D IV類 20~36 ; D V類



赤色



Fig. 23 神殿区域出土の土器 (テ-ヨ発掘資料)
1~30; DVI類

(3) チャビン・デ・ワントル遺跡の土器文化の変遷

三人の資料はいずれも質量共に充分とはいえないものであった。特に層位との関係については極めて限られたデータしかない。しかしその限られたデータを駆使して、あえてこれらの資料をまとめ本遺跡の土器文化の流れを追ってみることにしたい。

チャビン・デ・ワントルでは、現在知られている限りではチャビン期が最下層である。

まずどこからかチャビン・デ・ワントルの地に土器文化が入って来る (B群)。特徴は、直線幾何学文、外反鉢、赤色スリップが多い、地文技法が多様、器形の強調がほとんどない、といったことである。その内容は複数の起源を示唆している。遺跡内では基本的に北半を占めるようである。この文化は、海岸や山地の諸地域からの影響を受けて変容しつつしばらくの間独自の発展を続けていくが、やがて消滅する。

一方、これとは異なる文化も入って来る (D群)。この文化は、曲線刻文、多様で多数の地文技法、暗～黒色磨研、やや強調のみられる器形を特徴とする。これは遺跡内の南半を占めるものかもしれない。まだ不完全ではあるが、文様は、曲線による猫科動物を中心とした具象文→様式化→図形化・幾何学化→押捺による幾何学文 (A群)、という流れを一応考えることができる。これに伴って、非対称的な文様が対称的になり、器形、特に口唇形が強調されていき、また従来無文だったMにも文様が付けられるようになる、等の変化がみられる。A群は隆盛してD群にとってかわるようになるものと思われるが、この変遷過程はまだ複数の段階を欠いている。この流れとB群との関係は現資料では把え得ない。

D群が入って来るのはB群とほぼ同時なのか、遅れるのか、あるいはB群を制圧するのか、今のところ不明で、確証が得られるまで一時並存の可能性も含めて両者の関係は保留としておく。しかし、少なくともB群からD群が派生することは考えられない。チャビン文化出現の背景を考えると、チャビン期初期から複数の土器文化が並存していた可能性は残しておくべきであろう。

ところでこのような変遷は、神殿の建設、増築と関係することも考えられる。ルンブレラスやロウその他が建築物、石彫から建築段階を設定する試みを行なっているが、これらと土器文化とはまだ関係づけることはできない。

現資料ではA群の細分は不可能なため、A群内での変遷は辿ることができないが、そのおわり方は突然の感がある。すなわち、チャビン・デ・ワントルではA群のあと漸移的な変化なしに、形成期上層の赤地白彩の土器をもつ文化に変わってしまうのである。

このようにみえてくると土器文化の流れの中心は、D・Of I群→(ロカス・カナル (一部) →) A群、と考えることができるが、このような土器文化の流れは他遺跡との比較によって確認していく必要がある。

ここで一応チャビン・デ・ワントルの土器文化の変遷をまとめると、以下のようになる。

B I 群 → B II 群 → B III 群

D群・Of I—1群→Of I—2群→Of I—3群→Of I—4群→Of I—5群……→ロカス・

カナル…→A群
(一部) ロカス・カナル
 R区H層

E I 群 ? . . .

Ⅲ. チャビン式土器

チャビン式土器は従来、チャビン文化の拡大に伴って中央アンデスに広く分布したものとされてきた。しかしチャビン・デ・ワントルで一応把握された土器文化の変遷の様相はかなり複雑で、内容も多様であり、また搬入された土器もある。このような様々な土器全てを“チャビン式土器”の名で包括するわけにはいかない。もしチャビン・デ・ワントル出土の土器に基いてチャビン式土器を定義しようとするならば、チャビン・デ・ワントルその地の土器に基くべきであり、それはその地で独自の発達・変遷を遂げている土器である。チャビン・デ・ワントルでその流れを一応追っていけるのは、B群及びD・Of I群……→A群である。

しかしながら、これらには出現期から他地域との関連を示す土器が含まれている。D群の曲線文を伴う暗色磨研土器の出現は唐突の感がある。D・Of I群は北海岸のクピスニケとの関連が指摘されているが、クピスニケは北海岸でも突然出現するようであるし、何よりも北海岸の形成期の編年自体が極めて不十分で、クピスニケを北海岸の文化変遷の中に正しく位置付けることがまだできない¹⁸⁾。これは将来の最重要課題の一つである。

B群には、海岸、山脈東側との関係を示唆するものがみられる。先述したように、DV類、特にロッカー・スタンピングは、山脈東側の先チャビン期では一般的ではなく北・中央海岸に隆盛をみるが、それが先チャビン期なのかチャビン文化の影響下なのか、現今の資料では把握できない。山脈東側については、テーヨもバーガーも外反鉢やDI類に関してワヌコ盆地のコトシュ遺跡との類似を指摘している。コトシュ遺跡は、形成期を通じての文化連続を追うことができる数少ない遺跡の一つである。そこで、一例としてコトシュ遺跡と比較しながら、チャビン・デ・ワントルの土器文化の変遷を確認しつつ、チャビン・デ・ワントルその地の土器を考えてみたい。

コトシュ遺跡では、先土器期から形成期以降まで文化連続が確認されている。うち確実に形成期に属するのは、ワイラヒルカ期、コトシュ期、チャビン期、サハラパタ期の四文化期である。

テーヨやバーガーがB群の外反鉢、DI類の文様との関連を指摘しているのは、コトシュ期の土器群 Kotosh Grooved (KGvB I¹⁹⁾) である。この特徴は、口縁直下と底部直上に横線を引いて区画をつくり、その中に同様の凹線で縦や横、さらに長方形、菱形等の直線幾何学区画を描き、それを大型の正円刺突で埋める。刺突の配置はかなり規則的である。刻線には赤・黄、刺突には白の焼成後着色が施されることが多い。器形は外反鉢、口唇はわずかに外肥する程度で、器面は表裏共良滑～弱磨研、色は茶～こげ茶、胎土は茶～黒色である²⁰⁾。

バーガーはB 9区出土のもの (Fig. 7—18) をワヌコからの搬入として、また文様は異なるが器形の特徴の類似として復元可能な一点 (Fig. 5—10) を例示している。しかし、KGvB I は曲線が用いられることはまずないし、器面の色や胎土もこの例のような灰色磨研とは異なる。後者は、文様の違いはもとより大きさもずっと小さく、やはりコトシュにはみられないものである。したがって、バーガーの資料中にはコトシュ遺跡との部分的な類似は認められるが、直接的関係ましてや搬入と考えるものはない。たしかにワヌコ方面からの影響は認められるが、製作地の存在の可能性をも含め、間にいくつか中継地点が介在すると考えなければならない。

テーヨの資料中では Fig. 22—2, 5, 7, 8 が KGvB I との関連が考えられる。2 と 5 は規則的に配置された正円形刺突を有しているが、小片で器形特徴がわからない。しかし 7 と 8 は文様、器形特徴から KGvB I とかなり類似性が高いと認められる。(しかし胎土、器面調整は不明である。) 6 のラグビーボール形の区画はバーガーの資料中に類似のものがあったが (Fig. 7—20), 器形は半球碗である。またこのような区画は KGvB I にはない。テーヨの資料中には、わずかながらワヌコ盆地との直接的な関係を示唆する例があるが、それ以外の方が多く、やはり間に数カ所介在するものと思われる。

一方コトシュ遺跡ではコトシュ期に、従来は存在しなかった具象文やグラフィットを施された土器群が出現する。チャビン・デ・ワンタルのB群にも諸地域のもものが三々五々入って来るようで、チャビン文化の出現の背景を考える上で示唆的である。コトシュ期は、内容からみてワヌコ地方の文化の隆盛期といえるが、比較的短い期間のものと考えられており、突然チャビン期にとって代わられる。ワヌコ盆地は、おそらくチャビン・デ・ワンタルでD群が盛行する時期と対応して、チャビン・デ・ワンタルからの影響を受け、その傘下に組み込まれたものと思われる。

コトシュ遺跡のチャビン期の内容は、精製土器についてみると、基本的にD群、Of I群、A群と対応しているが、粗製土器はコトシュ遺跡の伝統的な流れからさして変わっていない。伝統的な文化は、チャビン文化の影響で大きく変容はするが、断絶はしなかったようである。土器文化にみられるこのような急激な変化は建築にも現われている²¹⁾。

チャビン・デ・ワンタルでは、A群の後は形成期上層の赤地白彩土器の文化となるが、コトシュ遺跡ではチャビン期の後、A群の名残をとどめるサハラパタ期となる。特に圏点文、S字文が盛行し、器形特徴もA群の残存形態が認められるが、全体的に単調になり退潮が著しい。両遺跡を比べると、チャビン・デ・ワンタルにおけるチャビン文化の終焉に関して問題が提起されるが、現時点では明確な結論は出せない。

以上のようにみえてくると、まずチャビン・デ・ワンタルで把えた土器文化変遷は、少なくともコトシュ遺跡と比較する限り、一応認めることができる。内容をみると、B群の特徴だったDI類、外反鉢は山脈東側、DV類は海岸との関連が考えられ、チャビン・デ・ワンタルその地のものというには問題がある。またB群の特徴と、D・Of I群……→A群の特徴は大きく異なっている。

一方D・Of I群……→A群は、コトシュ遺跡では、このような時間的な流れは把めなかったもの

の、これと対応する内容の存在が確認され、しかも地方文化の流れからみると突然のように出現していることから、この時点でコトシュ遺跡はチャビン文化の影響下に入ったものと考えられることができる。

それゆえ、“チャビン・デ・ワンタルの土器文化”としてみた場合、D・Of I群……→A群がその中心となろう。このことは、B群がD・Of I群にもA群にもつながらないままやがて消滅してしまうことから、首肯できるのではないだろうか。（しかし将来、同様の検討をD・Of I群……→A群と海岸の文化との間で行なう必要がある。）したがってチャビン・デ・ワンタルの土器文化に基いてチャビン式土器を定義すると、以下の如くなる。

具象的な猫科動物、コンドル、ヘビとその属性を主要モチーフとした曲線文が様式化して図形的、幾何学的になり、やがて押印捺技法による幾何学文へと変化し、器形特徴も口唇形を中心に独特の強調が次第に著しくなる、灰～黒色で光沢磨研された、HとCを主体とする土器群

いささか長いが、厳密に言えば、これら全てが揃って初めてチャビン式土器といえることになる。これらのうち一つでも欠けていたり異なっていたりする場合は、チャビン式土器の範疇外として、様々な側面からその位置付けを慎重に検討する必要がある。

今回の細分・編年は一つの試案にすぎず、今後さらに地方文化との比較も含めて検討整備していかなければならない。

ところで、チャビン文化の主な要素は、たとえば神殿のプランは海岸、石彫や土器等に描かれる曲線文のテーマは熱帯雨林に由来するともいわれている。その中で、熱帯雨林地域との中間点の山脈東側との、チャビン期とその前後をも含む長期間の関係が明らかになってきたことの意義は大きい。少なくともチャビン・デ・ワンタルの最古の文化の一つに山脈東側の文化が関与していること、チャビン文化の最大の特徴の一つである文様モチーフに熱帯雨林側のものが関係あると思われることから、次に目を東に転じて、山脈東側～熱帯雨林地域の形成期文化の様相を把握し、チャビン文化成立の背景について一考してみたい。 (つづく)

出典

- Fig.1 Ravines, R. 1981 p.125
Fig.2-1 Burger, R.L. 1984 Map 1
Fig.2-2 Lumbreras, L.G. 1971 p.2 Fig.2
Fig.3-1 Tello, J.C. 1960 p.72
Fig.3-2 Lumbreras, L.G. 1974b p.61 Fig.58
Fig.3-3 Tello, J.C. 1960 p.301 Fig.128
Fig.3-4 Tello, J.C. 1960 p.254 Fig.90
Fig.3-5 Tello, J.C. 1960 p.209 Fig.41

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

- Fig.3-6 Lumbreras, L.G, 1974b p.67 Fig.69
Fig.3-7 Kan, M. in Benson edi. 1972 p.71 Fig.2
Fig.3-8 Lumbreras, L.G. 1974b p.62 Fig.60
Fig.5~13, 15 Burger, R.L. 1984 Fig.13~377
Fig.14 Burger, R.L. 1984 Fig.7
Fig.16~17 Lumbreras, L.G. & H. Amat 1969 Fig.3, 4, 7, 9, 10
Lumbreras, L.G. 1971 Fig.11~17, 20~23
Fig.18 Lumbreras, L.G. 1971 Fig.7~9
Fig.19 Lumbreras, L.G. 1977 Lamina 5
Fig.20~23 Tello, J.C. 1960 Fig.146~168

註)

- 1) 時代区分法には諸説があるが、ここではルンブレラスに従う。(Lumbreras 1974b p.13, 49)
- 2) Willey, G.R. 1951 p.106
- 3) Rowe, J.H. 1962, 1967a; Willey, G.R. 1951
- 4) Lumbreras, L.G. 1971 p.3
- 5) Lumbreras, L.G. 1971 p.3~6; Rowe, J.H. 1962
- 6) Tello, J.C. 1943 p.151~152
- 7) Bennett, W.C. 1944 p.81
- 8) Burger, R.L. 1984 p.171
- 9) Burger, R.L. 1984 p.174 CHART 1
- 10) Burger, R.L. 1984 p.17~18
- 11) Burger, R.L. 1984 p.17, 107
- 12) Burger, R.L. 1984 p.21
- 13) Burger, R.L. 1984 p.20, p.367
- 14) Burger, R.L. 1984 p.18~21
- 15) Tello, J.C. 1960 p.337
- 16) Tello, J.C. 1960 p.337
- 17) Tello, J.C. 1960 p.344
- 18) クピスニケの土器は大部分が墓の副葬品である。
- 19) 筆者の細分・編年案(次回に詳述)
- 20) Izumi & Sono 1963; Izumi & Terada 1972
- 21) Izumi, S. 1971 p.67 Table 1, p.70

参 考 文 献

- Amat, O.H.
1971 "Proyecto Andino de estudios arqueológicos en la zona 2, Ancash", *Arqueologia y sociedad* Vol.5 p.36-56
- Bennett, W. C.
1939 "Archaeology of the North Coast of Peru", *American Museum of Natural History, Anthropological Papers* Vol.37 p.1-153
- 1943 "The Position of Chavín in Andean Sequences", *Proceedings of the American Philosophi-*

- cal Society* Vol.86 No.2 p.323-7.
- 1944 "The North Highlands of Peru, Excavations in the Callejón de Huaylas and at Chavín de Huántar", *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* Vol. 39 Pt.1.
- 1946 "The Archaeology of the Central Andes", *Bureau of American Ethnology, Bulletin* No. 143 Vol.2 p.61-147
- 1948 "A Reappraisal of Peruvian Archaeology", *Memoirs of the Society for American Archaeology* Vol.8-4 Pt.2.
- Benson, E.P.
1972 *The cult of the feline*. Dumbarton Oaks Research Library and Collections. Washington, D. C.
- Bischof, H.
1984 "Zur Entstehung des Chavín-Stils in Alt-Peru", *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 6.
- Bruhns, K. O.
1977 "Chavín Butterflies; A Tentative Interpretation", *Ñawpa Pacha* 15
- Burger, R. L.
1978 *The Occupation of Chavín, Ancash: in the Initial Period and Early Horizon*. ph. D. Dissertation, University of California, Berkeley.
1981 "The Radiocarbon Evidence for the Temporal Priority of Chavín de Huántar", *American Antiquity* Vol.46 No.3.
1984 *The Prehistoric Occupation of Chavín de Huántar, Peru*. University of California Press.
- Burger, L. S. and R. L. Burger
1982 "La Araña en la Iconografía del Horizonte Temprano en la Costa Norte del Peru" *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 4.
- Bushnell, G. H. S.
1963 *Peru. Ancient Places and Peoples*, Thames & Hudson
- Carrion Cachot, R.
1948 "La Cultura Chavín dos nuevas colonias: Kuntur Wasi y Ancón", *Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología*.
- Collier, D.
1955 *Cultural Chronology and Change Reflected in the Ceramics of the Virú Valley, Peru*. Chicago Natural History Museum, Fieldiana: Anthropology Vol. 43.
- Deetz, J.
1965 *The Dynamics of Stylistic Change in Arikara Ceramics*. University of Illinois, Series in Anthropology No. 4
- Engel, F.
1956 "Curayacu, a Chavinoid site", *Archaeology* Vol.9 No.2 p.98-105
- Ford, J. A. and J. H. Steward
1954 "On the Concept of Types", *American Anthropologist* Vol.56.
- Fung Pineda, R.
1972 "Nuevos datos para el periodo de ceramica inicial en el valle de Casma" *Arqueología y Sociedad* 7-8 p.1-12.

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

- 1976 "Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca",
Revista del Museo Nacional Tomo 41 p.129-207.
- Hill, J.N. and R.K. Evans
1972 "A model for classification and typology", in *Models in Archaeology* p.231-273. D.C.
Clarke edi. Methuen & Co. Ltd.
- Ishida, E.
1960 *ANDES*. 美術出版社.
- Izumi, S.
1971 "Development of the formative culture in the ceja de montaña of the Central Andes", in
Dumbarton Oaks Conference on Chavín, 1968 E. Benson edi.. Dumbarton Oaks Research
Library and Collections. Washington, D. C..
- Izumi, S. and T. Sono
1963 *Andes 2: Excavations at Kotosh, Peru, 1960*. Kadokawa Publishing Co..
- Izumi, S. and K. Terada
1972 *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 & 1966*. University of Tokyo Press
- Kano, C.
1979 *The Origin of the Chavín Culture*. Dumbarton Oaks, Studies in Pre-Columbian Art &
Archaeology 22.
- 狩野 千秋
1980 「チャビン式土器の起源」『考古学雑誌』 65-4.
- Keatinge, R. W.
1981 "The Nature and Role of Religious Diffusion in the Early Stages of State Formation from
Peruvian Prehistory", in *The Transition to Statehood in the New World*.
- Kidder, A. II
1956 "Settlement Pattern-Peru", in *Prehistoric Settlement Patterns in the New World*.
Viking Fund Publications in Anthropology No.23.
- Krieger, A. D.
1944 "The Typological Concept", *American Antiquity* Vol.9 p.271-288.
- Kroeber, A. L.
1944 *Peruvian Archaeology in 1942*. Viking Fund Publications in Anthropology No.4.
1951 "Great art styles of ancient South America", in *The civilizations of ancient American*,
Sol Tax edi. Vol.1.
Selected Papers of the 29th International Congress of Americanists.
1963 "The Methods of Peruvian Archaeology", *Ñawpa Pacha* Vol.1.
- Lanning, E. P. and T. C. Patterson
1967 *Peru before the Incas*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Larco Hoyle, R.
1941 *Los Cupisniques*. Lima
- Lathrap, D. W.
1971 "The Tropical Forest and the Cultural Context of Chavín",
in *Dumbarton Oaks Conference on Chavín, 1968* E. Benson edi.. Dumbarton Oaks Research
Library and Collections. Washington, D. C..

- Lothrop, S. K.
 1941 "Gold ornaments of Chavín style from Chongoyape, Peru", *American Antiquity* Vol.6 No.3 p.250-262.
 1951 "Gold Artifacts of Chavín Style", *American Antiquity* Vol.16 No.3.
- Lumbreras, L.G.
 1971 "Towards a Re-evaluation of Chavín", in *Dumbarton Oaks Conference on Chavín*, 1968 E. Benson edi. Dumbarton Oaks Research Library and Collections. Washington, D. C..
 1973 "Los Estudios sobre Chavín", *Revista del Museo Nacional* Tomo 38.
 1974a "Informe de labores del proyecto Chavín", *Arqueologicas* 15 p.37-55.
 1974b *The Peoples and Cultures of Ancient Peru*. The Smithsonian Institution Press. Washington, D. C..
 1977 "Excavaciones en el templo antiguo de Chavín (Sector R); informe de la sexta campana", *Ñawpa Pacha* 15 p.1-38.
- Lumbreras, L.G. and O.H. Amat
 1969 "Informe Preliminar sobre las Galerías Interiores de Chavín", *Revista del Museo Nacional* Tomo 34.
- Patterson, T. C.
 1971 "Chavín: an interpretation of its spread and influence", in *Dumbarton Oaks Conference on Chavín*, 1968 E. Benson edi. Dumbarton Oaks Research Library and Collections. Washington, D. C..
- Ravines, R.
 1982 *Panorama de la Arqueología Andina*. Instituto de Estudios Peruanos.
- Roe, P. G.
 1974 *A further exploration of the Rowe Chavín seriation and its implications for north central coast chronology*. Dumbarton Oaks, Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology 13.
- Rosas, N.H. and S.R. Shady
 1970 "Pacopampa: Un Complejo Temprano del Periodo Formativo Peruano", *Auqueología y Sociedad* 3.
 1974 "Sobre el periodo formativo en la sierra del extremo norte del Peru", *Arqueologicas* 15. p.6-35.
- Rowe, J. H.
 1962 *Chavín Art; an inquiry into its form and meaning*. The Museum of Primitive Art, N. Y.
 1967a "Form and Meaning in Chavín Art", in *Peruvian Archaeology: selected readings*, Rowe & Menzel edi.s.
 1967b "Stages and Periods in Archaeological Interpretation", in *Peruvian Archeology: selected readings*, Rowe & Menzel edi.s.
- Schaedel, H.G.
 1968 "On the Definition of Civilization, Urban, City, and Town in Prehistoric America", *Actas y Memorias del 37 Congreso Internacional de Americanistas* 1.
- Schiffer, M. B.
 1972 "Archaeological Context and Systemic Context", *American Antiquity* Vol.37 No.2.

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

Shepard, A. O.

- 1956 *Ceramics for the Archaeologist*. Carnegie Institution of Washington. Publication 609.

Steward, J. H.

- 1947 "American Culture History in the Light of South America", *Southwestern Journal of Anthropology* Vol.3 p.85-107.
1949 "Cultural Causality and Law: A Trial Formulation of the Development of Early Civilizations", *American Anthropologist* Vol.51 p.1-27.

Tello, J. C.

- 1929 *Antiguo Peru, Primera Epoca*. Empresa Editora Excelsior. Lima.
1942 "Origen y desarrollo de las civilizaciones prehistoricas andinas", in *Actas y trabajos cientificos del 27 Congreso Internacional de Americanistas, Lima, 1939* Tomo 1 p.589-720.
1943 "Discovery of the Chavín Culture in Peru",
American Antiquity Vol.9 p.135-160.
1956 *Arqueologia del valle de Casma: Chavin, Santa o Huaylas u sub-Chavin*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos. Lima.
1960 *Chavin, cultura matriz de la civilización andina*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos. Lima

東京大学アンデス地帯学術調査団

- 1961 「アンデス東斜面における形成期文化の研究—コトシュの発掘を中心として—」
『民族学研究』 26-4

Wiley, G. R.

- 1945 "Horizon Styles and Pottery Traditions in Peruvian Archaeology", *American Antiquity* Vol.11 p.49-56.
1948 "Functional Analysis of 'Horizon Styles' in Peruvian Archaeology", *American Antiquity* Vol.13 No.4 p.8-15.
1950 "Ceramics", in *Handbook of South American Indians* Vol.5.
Bureau of American Ethnology Bulletin 143.
1951 "The Chavín Problem: A Review and Critique", *Southwestern Journal of Anthropology* Vol.7 p.103-144.
1958 *Method and theory in American Archaeology*. University of Chicago Press.
1962 "The early great styles and the rise of the Pre-Columbian civilizations", *American Anthropologist* Vol.64 p.1-14.
1971 *An Introduction to American Archaeology* Vol.2. Englewood Cliffs, Prentice-Hall

Williams Leon, C.

- 1978 "Complejos de piramides con planta en U",
-80 *Revista del Museo Nacional* Tomo 44.

A Study of the Formative Culture of the Central Andes, Peru (I)

—Chronology of Chavín Pottery—

Kayoko TOSHIHARA

I. Introduction

Chavín is known as the most important one of the Formative cultures of the Central Andes. Its geographic extent, time duration and relationships with other regional cultures, however, remain vague and unclear. Particularly Chavín Pottery is poorly defined in its content and meaning. Despite the importance of Chavín Pottery to understand the cultural dynamics in the Formative period of the Central Andes, its spatial distribution and stylistic change are still uncertain. As a result the label "Chavinoid" has been overused for many regional cultures and has caused confusion. It is necessary, therefore, to set criteria to clarify the content and to document the change of the ceramic culture at Chavín de Huántar, and to define Chavín Pottery in order to make future comparisons.

The basic data on Chavín de Huántar was collected by the following archaeologists: R. L. Burger, who asserted to have verified the cultural stratigraphy at Pueblo Chavín; L. G. Lumbreras (and H. Amat), who excavated the Temple of Chavín and first proposed a typology for Chavín Pottery; and J. C. Tello, who also excavated the Temple and was the first to assert the importance of the Chavín de Huántar site.

The data from these three sources was reorganized using new criteria based on stratigraphic evidence and typological proceedings. From this a new subdivision and relative chronology will be proposed, and a preliminary definition of "Chavín Pottery" made.

II. Ceramic Culture of Chavín de Huántar

(1) Review of Ceramics from Chavín de Huántar

(a) Ceramics excavated by R. L. Burger

In order to develop chronology and to define the extent of the ancient settlement, Burger excavated the surrounding area of the Temple. The 5 excavated locations are named A to E, and at locations A, B, D and E he found layers containing artifacts (fig. 2-2). In unit E1 and D1 he asserted to have verified the stratigraphic superimposition of different cultural

phases. On the evidence that the upper layers had included the same content, combined with stylistic seriation, he concluded that the cultural sequence at Chavín de Huántar is as follows:

Urabarriu phase → Chakinani phase → Janabarriu phase

Burger classified the ceramics by the form and features of the vessels, and then subdivided each class by the variations within the form and the features (lip, neck, wall etc.). There are, however, variations of a single feature in the same vessel and there are many variants of a particular feature in one cultural phase. Burger classed together morphological similarities without considering stratigraphic position of the ceramics. Further, to have older aspects is different from to be age. The temporal position of pottery is defined basing upon the stratigraphic evidence and the typological proceedings. To verify the relationships between phases it is necessary to analyze the stratigraphic content at each location (classification) and to compare it with other locations (crossdating).

The data of Burger, therefore, are classed by the layer of each location and classified by decorative criteria, which can easily be identified from the figure.

Classification:

Plain	dark ~ black	P I	curved lines	D III
	red (with/without red slip)	P II	modeling	D IV
Decorated	incised lines & punctations	D I	texturing	D V
	straight lines	D II ↗	stamps & seals	D VI

The major forms of vessel, the features and surface finish (fig. 4):

- (M) Neckless Jars: large, usually plain, thin wall, thickened lip;
exterior is well-smoothed, interior smooth.
- (T) Short-necked Jars: varying with size, slanting, length of neck; usually plain,
exterior well-smoothed to polished, interior smooth.
- (C) Bottles: single spout or stirrup spout, usually decorated on the body;
exterior is polished, interior smooth.
- (H) Bowls: semispherical or with straight walls; usually decorated on the surface,
exterior and interior well-smoothed to polished.

<Ceramics from Location A> (fig. 15-1~15)

A is located to the northwest of the Old Temple. Since the amount of pottery found here is small and the stratigraphy unknown, all of the ceramics are classed together. P I, D III, D V, D VI are the main, P II, and D I were not found.

Designs are made by applique, straight lines and curved lines. Certain features are stressed including C with flanged rims, H with beveled rims, M and T with thickening on the exterior

or interior walls. This group of ceramics is called Group A.

<Ceramics from Location B> (figs. 5~8)

B is located in the northern part of the site, in the lower sector of the modern town of Chavín de Huántar. Units B 1-7 consist of two parallel trenches (B 1-4, B 5-7) 3 m apart. Comparing the two sections, the depth, thickness and soil there suggest that the 8th layer of B 1-3 corresponds to the 12th layer of B 5-7, and the 6th and the 7th layers of B 1-3 correspond to the 11th layer of B 5-7. Since this has not been verified, however, these layers are here treated separately. The 6th layer of B 1-3, the 12th and the 11th layers of B 5-7 are discussed in detail, because their stratigraphic positions are secure and they contain a large quantity of sherds.

At Location B, P II, D I, D II and D V are overwhelming and there is very little emphasis on the form. The content suggests that these ceramics belong to the same culture. These can be further divided into 3 groups based upon the presence or absence of D I, the amount of concave-sided and convex-bottomed bowls with D II, and the degree of thickening.

Group B I : Layer 12 (B 5-7), B 5 extension, and B 8·9·10 ; Some fragments suggesting relationships with other regional cultures are found.

Group B II : Layer 11 (B 5-7) and B 4 platform ; Sherds of imported pottery are seen.

Group B III : Layer 6 & 7 (B 1-3) ; Fragments of imported pottery and of the pottery probably from other region are found.

The relationships between them are : B I → B II = B III based on the stratigraphy, and B I → B II → B III based on the typological proceedings.

<Ceramics from Location D> (figs. 9~13)

D 1 is located on the steep valley slope and D 2 is below it. D is the nearest of all four locations to the temple area. Though there were many layers containing artifacts at Unit D 1, the ceramics from only a small number of the layers are illustrated. Here the 9th, 10th and 17th layers are discussed, for the same reasons as Location B. Since the amount of pottery found at D 2 was small and the stratigraphy is unknown, all of the D 2 ceramics are classed together. The total quantity of data from Location D is relatively low.

The contents of Location D can be divided into two groups: the lower (17th & 18th layers of D 1) and the upper (of D 1) + D 2. The lower culture is characterized by P I, D III, and D V. Stylized feline motifs are probably depicted. Texturings are various and abundant. The surface is highly polished without tracks, and the features tend to be emphasized a little.

In the upper culture P I, II, D IV, V, VI, the oversized bowl (P II) and the affixed

clay band (DⅣ) are characteristic, as well as stamped or sealed geometric designs. Features are strongly emphasized and the surface is highly polished. The content of Unit D 2 corresponds to that of the upper culture.

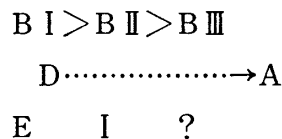
These two groups belong to different cultures. Burger argued that the upper (Janabarriu ph.) derived from the lower (Chakinani ph.). But the difference between them is quite great and the lower cannot continue directly to the upper. It seems that several developmental steps are lacking. The lower is called Group D I and the upper with D 2 Group D Ⅱ.

<Ceramics from Location E> (fig. 15-16~22)

E is located northwest of the Old Temple. Only one pit of 1.5×1.5 m was excavated. At this location the stratigraphy was complicated, and a platform consisted of a series of layers. A stone platform was also found, but their relationship is unknown.

There are several problems about the correspondence between the stratigraphy and the ceramics, especially in the lower layers. Consequently it can only be said at the moment that Group B and/or Group D I might exist at the lower part of this location. In the upper layers (ie. from the 8th) ceramics of D Ⅲ, D V and D Ⅵ are seen, and D Ⅵ is overwhelming. The content is identified with that of Group D Ⅱ at the Location D. Ceramics from E 1 are separated into two groups and the lower layer is called Group E I and the upper Group E Ⅱ.

At Location B the ceramics seem to have derived from at least two origins. The ceramic culture here continued for a while, having been changed by influences from other cultures. This is called Group B. At Location D, Group D I and D Ⅱ have different contents and chronological positions. Since Groups A, D Ⅱ and E Ⅱ have the same contents, they are classed together and called Group A. And Group D I is then called Group D. The relationship between these groups has not yet been verified, but it is tentatively proposed as follows:



Problems for the future are: the origins of the ceramic culture at Chavín de Huántar, including the relationship between Groups B and D; the development and the collapse of the ceramic culture, including the changes in each group A, B and D; and the relationship between ceramics and constructions, especially in Unit E 1.

(b) Ceramics excavated by L. G. Lumbreras (& H. Amat)

Lumbreras and Amat have excavated many subterranean galleries and small rooms etc.

The amount of published data, however, is very small compared with what is dug and the whole content is yet unclear. The correspondence between ceramics and stratigraphy has not been verified. Pottery from 3 locations in the temple area are treated here: Ofrendas Gallery, Rocas Canal and Layer H of Sector R (fig. 2-2).

Lumbreras and Amat have tried to establish chronology based upon two groups of ceramics found from different constructions, a gallery and a canal. Considering the characteristics of the constructions—the former is an offering place and the latter a drain—there is the possibility of a mixture of various materials. It is necessary first, therefore, to clarify the content of each location.

<Ceramics from Ofrendas Gallery> (figs. 16 & 17)

This subterranean gallery is situated in the northern portion of Sector R. The pottery is divided into two groups based upon decoration, surface finish and paste.

Group Of I; stylized or realistic designs drawn by curvilinear incision (D III) (+ D V or D IV). C (single spout) and H are common. The surface is highly polished, the color is gray to black. Features are almost non-stressed.

Group Of II; various ceramics are seen. These are called Mosna, Wacheqsa and Raku by the excavators.

Group Of I is subdivided based on decoration.

Of I -1; realistic, asymmetric designs—feline, condor, snake etc.

Of I -2; slightly stylized combination of motifs.

Of I -3; highly stylized fangs and eyes are emphasized, designs are complex.

Of I -4; more stylized but becomes geometric—many symmetric designs are seen.

Of I -5; both the elements and the arrangement of the design are symmetric, stamped circle-dots are used instead of texturing.

Since there are great differences between Group Of I and Of II, these probably derived from different cultures. Group Of I has a similar content to Group D and indicates a developmental process of curvilinear designs. Group Of II should be considered from the viewpoint of both regional and chronological differences.

<Ceramics from Rocas Canal> (fig. 18)

The data from Rocas Canal consists of the ceramics from the second section of a subterranean drain located in the northwest part of Sector G. For the most part, this drain is unexcavated and the whole contents are not yet clear. The amount of the published data is very small and all of the sherds are decorated.

D II through D VI were found here, though the identification of D II and D III is not

secure.

D IV; with affixed band both vertical and horizontal, probably from oversized bowls.

D V; texturing with either incised or applique circles

texturing—dentate rocker-stamping, dentate impression, combing+applique nubbins;

C (stirrup spout) with flanged rims and H are common.

D VI; stamp—(incomplete) circles, circle-dots, concentric circles, crescents, and J-shaped designs arranged in a row or irregularly around the upper half of the body (H).

D II ?; stylized motifs drawn in straight lines, with red slip (H).

D III ?; applique curvilinear stylized designs sometimes with texturing; C (stirrup spout) with flanged rims.

The presence of D VI indicates the identification with Burger's Group A. It is difficult, however, to define the positions of D II ? and D III ?.

<Ceramics from Layer H of Sector R> (fig. 19)

This is the lowest verified layer from the eastern end of Sector R. Only 7 sherds are shown. PI, D III and D VI are present.

Decoration, features of vessels indicate these are identified with Group A.

In the data of Lumbreras (and Amat), there seem to be ceramics of various cultural stages. While the designs change gradually from realistic to stylized and then geometric, the features remain almost the same through Group Of I. Correlating design with vessel form, texturing is rare on H where designs geometric, while on C texturing is dominant and designs change to geometric but texturing-emphasizing ones. Of I-5 has stamped circle-dots as a kind of texturing. Based on the data discussed, Group Of I can be positioned between Group D and Group A, though some of the steps are still lacking. The pottery from the Rocas Canal and Layer H of Sector R are identified with Group A, but other groups may also be contained in the Canal. The ceramics of Rocas Canal should be discussed more carefully in the future when more data becomes available.

(c) Ceramics excavated by J. C. Tello (figs. 20-23)

Tello was the first who excavated the temple. Tello divided all of the ceramics into groups on the basis of with/without decoration and the types of decoration. Vessel form was treated as a variable within each group. His data contains all of the types, PI~D VI.

Tello suggested that some D I sherds were related to the ceramic culture of the Kotosh site in the Huánuco Basin on the eastern slope of the Andes. In his D III there are some sherds with the decoration of D III + IV (+ V), which are similar to those from the Rocas Canal. Bowls, single spout and stirrup spout jars are chiefly seen. Also in D V some sherds

resemble those from the Rocas Canal, having decorations of D V + incised or affixed clay circles. According to Tello's interpretation, the circular designs of D VI represent pupils, the seals express feline faces, and the S-shaped ones portray snakes. Tello's data includes many variations of each decorative style.

(2) Ceramic Culture Change at Chavín de Huántar

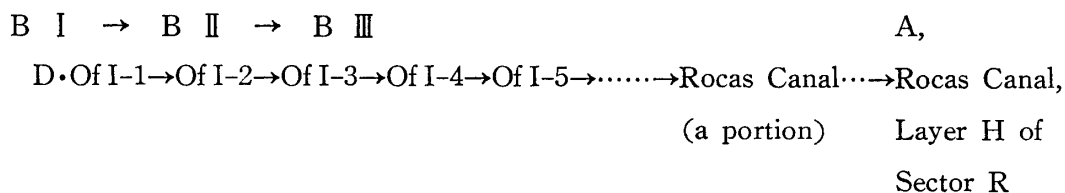
Despite the fact that the data from Chavín de Huántar is, as yet, insufficient both in quality and quantity, the following perspective can be tentatively proposed.

The Chavín period at Chavín de Huántar is said to be the earliest so far known. There is evidence that some outside ceramic cultures came into Chavín de Huántar, probably from multiple origins: concave-sided and convex-bottomed bowls with geometric designs by straight lines, post-coccion, H and C (single spout) with texturing, red-slipped wares and non-stressed features are the characteristics of this culture (Group B). The Group B culture gradually changed with outside influences.

There is evidence of another culture that occupied Chavín de Huántar (Group D), but it is not known whether this culture arrived at almost the same time as the BI Group or later. Group D 1's H and C pottery with curvilinear designs expressing the feline, condor, snake....; the texturing; highly polished dark coloring and the little-stressed features are all characteristic of Group D. The realistic designs became gradually stylized, and eventually geometric motifs, expressed by stamps and seals. Adding the change in decoration, the marked increase in the thickness of lips reflects the evolution of Group D to a new group—Group A. By this time, Group B had disappeared.

After Group A, there suddenly appeared the culture with White-on-red Pottery. Unfortunately, changes within Group A cannot be pursued at present. The relationship between Group B and D is pending until further evidence is verified. At least, however, it is impossible that Group D derived directly from Group B. Although comparison with other regions is necessary, the main current of the ceramic culture seems to be Group D • Of I → Group A.

After all, the ceramic culture at Chavín de Huántar may be summarized as follows:



III. Chavín Pottery

The ceramic culture of Chavín de Huántar consists of various groups of ceramics in which the contents and changes are complex. Moreover, imported pottery is sometimes found. Ceramics with this great diversity cannot be embraced under the label "Chavín Pottery" as an index of the culture. In order to define Chavín Pottery based upon the ceramics at Chavín de Huántar, the ceramics proper to Chavín de Huántar should be considered. The development of such ceramics are peculiar to this site. At Chavín de Huántar, Group B and Group D • Of I → Group A can be followed their own independent evolution.

In Group B I some sherds point to the eastern slope of the Andes, but were not imported directly from that region, judging by the decoration and features. The fact that texturing is not a typical decoration in the eastern area suggests another place of origin. In Group B II, other regions on the coast are suggested. But in these regions the chronology is not yet well established, and they cannot be given definite positions. In Group B III some sherds suggest influences from both the northern highlands and from the coast.

In Group D, the content indicates north (or central) coast, especially based upon D III and D V. Since the development of the regional cultures is not clear, the relationship cannot yet be defined.

In comparing the ceramic culture at Chavín de Huántar with that at Kotosh in the eastern Andes, the contents of Group D to A correspond to that of the Kotosh-Chavín culture. However, Kotosh-Kotosh culture, which is said to be related with Group B, is the flourishing period of the regional culture that was suddenly replaced by Kotosh-Chavín culture. This means that the Kotosh site came under the influence of Chavín culture after Group D became dominant at Chavín de Huántar. There is no data on Group B at this stage.

As Group B can be considered to be related to some other regional cultures and as it disappeared soon after some developments at Chavín de Huántar, Group B does not seem appropriate to be called the pottery proper to Chavín de Huántar.

Therefore, Group D • Of I → Group A can be tentatively proposed as Chavín Pottery. That is, Chavín Pottery is decorated with curvilinear designs expressing feline, condor, snake images which change from realistic ones, gradually stylized to geometric designs with stamping, dark coloring with high polishing, having various unique features and among which the thickening at the rim is gradually emphasized.

The cultural change at Chavín de Huántar is verified at least comparing with that at Kotosh site in Huánuco basin in the eastern Andes. At Chavín de Huántar, a Late For-

中央アンデス形成期文化の研究 (I)

mative culture appeared suddenly after Group A, while at Kotosh the traces of Group A can be seen in the post-Chavín culture, Sajara-patac, although the content as a whole is at an ebb.

In the future, a more detailed analysis of cultural change at Chavín de Huántar should be pursued involving comparisons with other regions and including the background of the rise and collapse of Chavín Culture.